

505
35

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





吾等何を學ぶべき乎
第二期
(10)

長谷川猪三郎著

歴史の話

世界思潮研究会版

1924



大正

13.6.13

内交

はしがき

歴史は死したる過去ではない。現在への科学であり、未来への哲学である。人によつては最高の意味での藝術でさへあらうとしてゐる。

ハインリッヒ・リツケルトの歴史哲学が遽かに學界に重きをなさうとしてゐる時、カール・マルクスの唯物史観は素晴らしい勢ひを見せて、ブルジョアの舊世界をぐらつかせ出した。革命ロシアの現實は例證するだもすさまじき限りである。實際、この私の名づける「歴史的大地震」は、その地域的な範圍から云つても、わが朝の濃尾地震などの比ではない。むろん、兩方とも地底の不逞漢の仕業にちがひないのであるが、唯、ロシア種の大鯰は、どうやら飛び抜けた「社會科學者」らしいのに、日本の濃尾平野に潜んだ大鯰は、どう見ても「自然科學者」だつたらしく思はれる。いづれもダイナミックな大早業には人の子

たる我等のひとしく驚嘆するところである。

社會運動でも、水平運動でも、婦人運動でも、いかなる主義、學說にもせよ、歴史觀の背景なしには、もう半歩たりとも前進は覺束ないやうに想はれる。

歴史は今、クリストに更つて豫言者として樹とうとしてゐる！これは誇張の言でも異端の説でもない、事實はクリストをも釋迦をも支配したものが、歴史の法則ではないか！

新しい意味での史學の改造が火の如く行はれつつある。今や正しい歴史觀、鋭い歴史觀は新興階級の何人にも缺くことのできないものの一つだ。

わかり易く正しき概念を興味ゆたかな暗示力で一直線に讀者に迫まらうとしたのが、私の此書をものしようとしたそもくの抱負であつたけれども、何分にも短日時と不用意な問答體なので、その結果たるや甚しく不満足である。遠

からぬ時日を期して「歴史學概論」の大きな型で、創意ふくよかに讀者に酬いた
い確い決心が、凝つと今わたくしの脳髓の主要部に冷かに燃えさかつてゐるこ
とを知つて戴きたい。

研究は科學的に、表現は藝術的にの標語は此處では見る影もない行路病者の
身なりではある。けれども日本に一冊の史學概論なき時に際して、貧弱なるこ
の書が尙露拂ひの役目でも務め得るとすれば寧ろ望外である。省みて、それが
目慰にすら値しなかつたことを私は恥ぢる。終りにベルンハイン教授と石渡山
造氏に心からお禮して書き磨らしたペンを折らう。

一九二四年の春四月

郊外の池袋にて

長谷川猪三郎

目次

- 一 歴史といふ言葉の意味……………(一)
世界に於ける歴史の語原——科學としての歴史とは何ぞや
- 二 歴史の階段……………(九)
 - (一)物語風の歴史……………(九)
歴史の父ヘロドタス
 - (二)實用的の歴史……………(一一)
タキツス
 - (三)發生的の歴史……………(一五)
發展の概念——現代的史観

目次

三 歴史哲學

(一) 神政的史観

アウグステイヌス—グロッパ—正統加特力派の史観—新教正統派の史観

(二) 唯物論の歴史哲學

A 生物學的史観

ダーウインの進化論—ヘルワルト—ゼーク

B 經濟學的史観

マルクスの唯物史観—エンゲルス—ラファアルグ—ペーベル—カウツキイ

(三) 實證論の歴史哲學

コムトの實證主義—ミル—スマンサア—パツクル—リトレ—テイヌ—ランブレヒト—アルド—

(四) カント派の歴史哲學

カントの歴史哲學—フイヒテ—シエリング—ヘュゲル—ランケ

(五) 人生論哲學

ヘルデルの人的史観—フンボルト—ロツツエ

(六) 新理想主義の歴史哲學

リツケルトの歴史哲學—ウインデルバント—ラスカ—アイルタイ—シュメル

四 日本の史學界

(一) 日本の史學界の現状

(二) 日本に於ける歴史哲學

田邊元の歴史哲學—鈴木宗忠の歴史哲學—高田保馬の歴史哲學

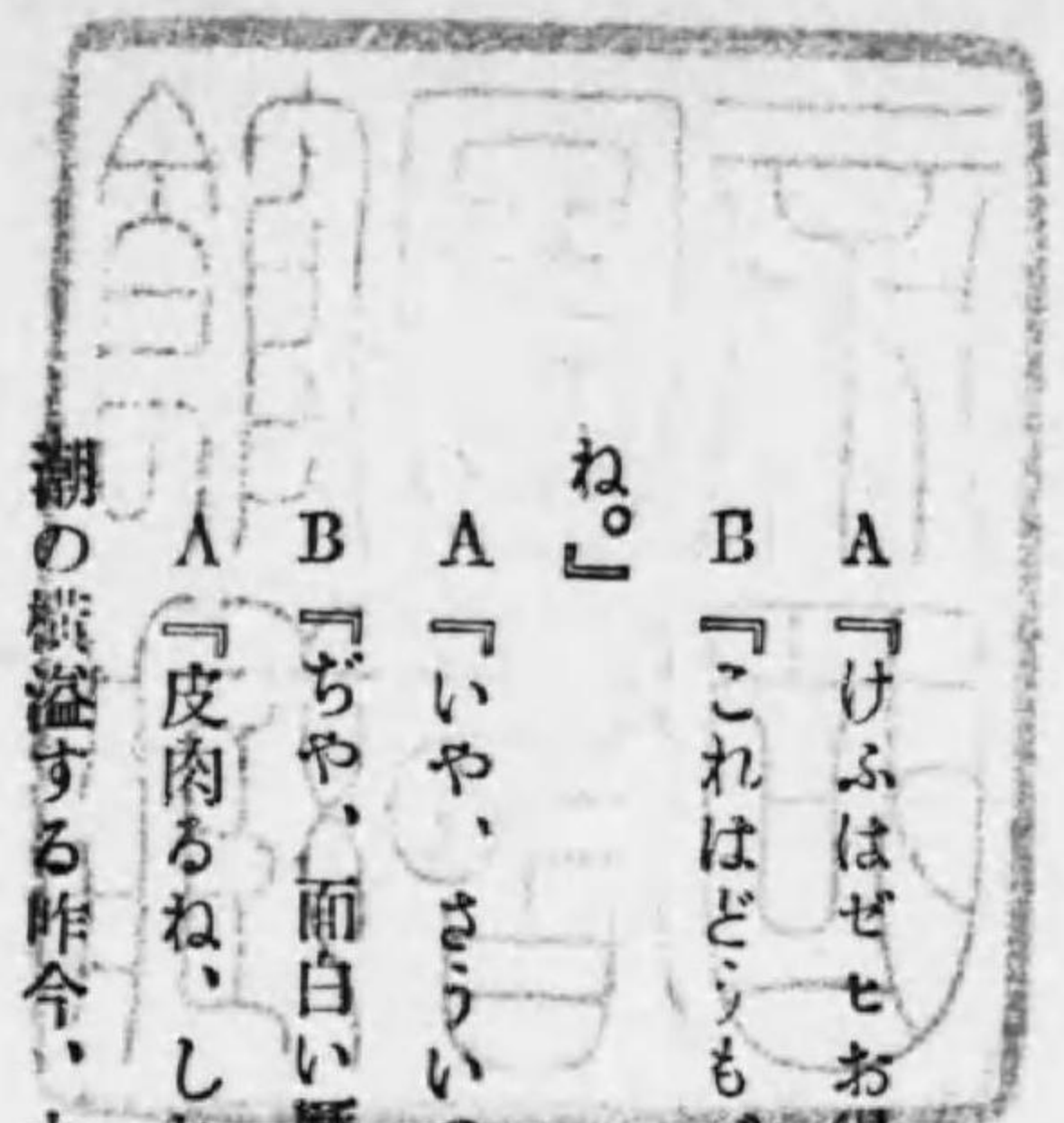
(三) 日本の歴史家とその著作

目次(畢)

目次

歴史の話

一 歴史といふ言葉の意味



A 「けふはゼセお得意な歴史の話でも聴かせてもらはふと思つてやつて来たんだが……。」
B 「これはどうもバカに學究的に改まつてのお話だね。歴史とは何ぞや？ とでもいふかね。」
A 「いや、さういつた鹿爪らしいことで疊みかけるのぢやない……。」
B 「ぢや、面白い歴史講談でも御所望といふのかい、源平盛衰記の焼直しでも一席やらうか。」
A 「皮肉だね、しかし、いくら僕が低脳だからつて、あんまり甜めたものぢやないぜ。改造思潮の横溢する昨令、少しは科學的に取扱つてもらはなくつちあねエ……。」
實はかういふと訝かしいが、けさ學校の妹のやつから「リッケルトの歴史哲學」つてどんなこ

とかつて挑戦されたんだよ。彼女に對してだけは術學的ペダゴギックの僕のことだ。そこは何かゴマかしておいたものの、相憎くと僕には歴史のレの字の解釋も満足にできないのでね。内心すくなくならず、慚愧たるものがあるといふ譯なのさ。そこで一念發起して畏友B君の門を叩いたといふことになつたんだ……。」

B「ぢや、Y博士あたりの口吻でゆくと「戀愛至上への智的背景としての歴史哲學研究の恥的心的動機」つてやつなんだね。」

A「口が悪いな、だからちやんと妹だと、斷つてゐるんぢやないか、俺はこれでも一個のピュリタンなんだ。ラバアなんてない！」

B「あんまり當てにならないね。まアそんなに柄になく奮慨するなよ。奮慨したんぢや君！いはゆる科學的なる歴史の取扱ひは出来なくなるぢやないか、早い話がこの大日本帝國ぐらひ、歴史々々つて騒ぐ辯に、亦この國ほど科學的なる歴史書の缺乏してゐる國も世界に無比だらうからね。」

それには歴史學の意味が普及されてゐないのと、摺んでた學問的良心のある史學者が拂底してゐると、それから、もう一つには、君のやうな無暗と奮慨する戀愛の遊子、いや愛國の志士の忠勇なる昂奮によつてもなされたり、その邊の御用學者によつて尤もらしく丁稚あけられた「日本歴史」であるからなんだ……。」

A「まあ、待ちたまへ。ヘンなところで斃罪の冤罪を構成せられてしまつたもんだね。が、それにしても夫子自身、よつほど奮慨されてゐるやうぢやないかね……。しかし、君の喋りぶり、あの頃の「校長先生の歴史の時間」よりか、よつほど面白さうな氣がするよ、なにかかう悪人と知りながらも誘惑されて行くやうな、一種微妙な心理状態になつてくるよ。」

B「煽だてちやいけない、が、お互に眞面目で史學のABCだといふ立場からならいろいろ話しあつて見ることも滿更ら無意義ぢやなからうからね。」

いよくこれからマジメになつて、リツケルの歴史哲學でも、マルクスの唯物史觀でも、ランケやランプレヒト、何でも知つてゐることだけはお話することにしようかね。」

A「ウム、では啓蒙運動をやつてもらはふ。最初にまづ、歴史といふ言葉の意味から聞き嚙つてゆかう、イロハのイの字からお願ひするよ。」

B『イロハのイの字でなく、レキシのシの字だ。「史」といふ漢字は記録を掌るものの意味でもとは使はれてゐたのが、いつのまにかそれが記録を意味するやうになつたのだ。昔は日本でも史といへば主にも歸化人で、もつばら文筆のことに従へる者の姓としてゐたのもわかるだらう。

英語では御存じのヒストリイ History が歴史といふことだが、これは佛蘭西語のイストアール Histoire 伊太利語のストリヤ Storia などと同じことで、希臘語のヒストリヤ Historia から起つたのだ、原意は「いやしくも探究して獲得された知識」といふにあるらしく、獨逸語のゲシヒテ Geschichte なる語は、「苟もなにごとでも起りつつあること」「起りたる事」を意味すると同時に、かくの如く「起りし出来事の知識や物語」をも意味するのであつて、ある一つのまとまつた範圍で用ゐるのぢやないのだ。和蘭語では、慥かゲスヒイドニス Geschiedenis 露西亞語ではイストーリヤ ИСТОРИЯ が歴史だつたらうと思ふ……。」

A『なるほどねエ、このくらゐの事を、文化人たるわれ／＼が知つておくことは、あながちベタンテイツクといふべきでもないね。』

B『さて、われ／＼が國家の歴史、民族の歴史といふやうに、同じく植物や動物や地殻などの

歴史といふこともできるのだ。實際、近代自然科学の力は、あの夜の空に輝く無数の星や大氣のもとに澄みわたる蒼空——無邊際なる此の宇宙の知られなかつた歴史でさへも、洩すことなしに鋭く觀察するまでに進歩するやうになつたのだよ。しかし、それはそれとして、さて、これは特殊の科學としての「歴史學」といふ意味だけであるなら、それはたゞ人間界に關聯してゐる事柄だといふことに過ぎないのだ。だから、ゲシヒテにしてもヒストリイにしてからが、歴史といふものを「起りたる事」そのもののみではなく、そのほか歴史の知識やその研究、敘述、學それ自身などを表示してゐるのであると解しなければならぬ、こんな工合で歴史といふ一語が多義にわたる意味をもつてゐるので、しつかりした概念上での差別をつけてかからなければならぬのだが、つて吾々は尙さらかうしたことに注意する必要が起つてくるのだと考へなければならぬね。』

A『あまり君が滔々とやりすぎるのでわからなくなつちやつた。失敬だがもう一度、そこを判りよくいひ直してくれないか。』

B『つまりね、今いつたやうに文字どほり言葉どほりに見ても、いろ／＼な相違があるので、

われ等は、その時その場合によつて歴史といふ語をいろ／＼な意味につかつて平氣でゐられるのだが、それはたしかに非科學的な話だし、したがつて誤解を招く原因となるといふわけなんだ、例へば「大日本帝國は萬邦無比の歴史を有す」と得意がる御用學者があるとすればだ、それはもう記録としての歴史ではなくなつて、つまり日本といふ彼女自身の妄想からくる自筆履歴書か、でなければ「天壤無窮」の國運發展の過程を示すといふことになるわけなんだ。それとあべこべに「わが國には未だ一の見るべき歴史がない」と昂奮する人があつたとすれば、彼が歴史といふ語を單なる「記録」と見てゐないといふことはよく判るけれども、さりとてこれでもつて日本帝國の經歷や國運發展の過程といふやうな見解をとつて居るのでないことも亦わかりきつてゐるのだ。」

A 『ではいつたいどんな意味合ひなんだね。』

B 『つまりだ、ラジカルな歴史科學の立場にたつて、從來の有がたい官報的な記述を根こそぎに轉覆しあつたばれ「日本歴史の書替」を發表するだけの意氣こみからだといへるぢやないかね。』

A 『だん／＼君の説をきいてゆくと、僕の方でも、もう漠然と「歴史とは何ぞや」といふよりか「科學としての歴史とは何ぞや」といつた限定した質問が必要となつてくるわけだね。』

B 『さうとも、だから今から僕たちの話し合ふことは、いづれも純乎たる科學的な立場にたつての話だ。』

A 『フム、これでまづ、言葉の意味や大體の意味はよく解つて來たとしても、だが、歴史學の内容とか範圍とかになると依然として未だ漠然たるものだね。即ち、百尺竿頭一步を進めて、歴史が取扱ふべき事件は如何なる種類のものであるかといふことを充分科學的に合點のゆくように聽かしてくれ給へな。』

B 『これは結構な問題を提示していただいて有がたい仕合せだね。これほど廣大で、そして重要な質問の矢面に立つてなれば僕たるもの打死すればとて悔ゆるところはない。

そこで僕等は此の問題を理解すべく、ずつと溯つて根本のそも／＼に就いて考へなければならぬだらうふ。

で、先づ僕らは鋭く科學界の發展ぶりを大觀する必要があるのだが、その時僕らは一つの事實にぶつかつて來る、つまり、夫れは現象界のあらゆる知識分科のなかで、われ／＼がその概念を探求する場合に、きつと逢着する大切な事實なんだね。それはほかでもない、すべての知識分

科は文化の進行につれて變化するものであるから、ここに一つの科學があるとすれば、その由來が古ければ古いほど、その變化はますます甚だしいといふことになるのだ、つまり知識といふものは、多小とも對象の不秩序な數へ上げや、またはその集列からして一般的特徴をもつて出來あがる系統的序列へとだん／＼向上してゆき、眼につく外的標識から内的關聯や構造や固有性のそれへと進んで、次第に深まつてゆき、つひには因果連絡の認識を基礎として、全部の領域を一つの有機的な全體であると解釋せられるやうになるのだ。そこで始めて僕らのみる現代の觀照にしつくりと合ふ一個の正しい科學となつてくるといふ譯になるのだがこのやうな漸進的な發展は、歴史に關する知識の場合でもすこしのかはりもなく、同様に示されてゐるのだといへるだらうね。僕等は、そこでよく心して此の力強い進歩を見誤らないやうにしなければならぬが、こうした看過はこれまでだつてしばしば行はれてゐた譯なんだ。つまり、古くから歴史は藝術的に面白いやうに書かれてゐた、この點では其の一部分は古代ギリシヤ人やローマの方が後世のものよりも優れたところがあると云ふことができるのだが、といつて、それらの古典作者の科學的立場と新時代の歴史學科學的の立場との間には、瞭かに本質的といつてよい差異が認められる

といふ事を忘れてはならないんだがね。』

二 歴史の階段

B 『いつたい歴史的知识の發展ぶりは三つの階段に分けてみる事ができるが、この階梯は今も云つたとほり、一切の知的發達における階段に相當すると云へるのだ。』

A 『その三の階段といふと？。』

B 『つまり(1)單に物語り亦は數へ上げる階段(2)教訓的若しくは實用的階段(3)發展的或は發生的階段と、この三つなのさ。』

A 『ひとつつ委しく教へてくれたまへ。』

(一) 物語風の歴史

B 『この物語風歴史の階段では、歴史の材料をその起つた自然の時の順序で物語つたり數へ上げたりすることだけで満足するのさ。歴史的材料に關した眼の配りかたはさまざまな方向に向けられるにちがひないのだからそれに應じていろいろな再現の形式が生じてくるやうに自然なつて

不
三
三

くるのだ。いちばん古いのは謂ふまでもなく数奇な人間の運命であるとか冒險などの美的興味である、それからこれに相當した半ば歴史で半ば傳説の歌とか詩のやうなものが生まれてくるのであつて、それらのことは何處の民族史の始めでも、きまつたやうにぶつかるものなんだよ。だから、ホーマーの史詩といへども歌はれたる歴史にすぎないといへるね。名譽や榮光を憧憬する心ばえや、偉大と思はれる人物や、残さるべき業績などをいつまでもいつまでも記憶にとどめたいといふ願はくは、さらに他の方面の記述を自から惹き起さずには措かなくなつてくるんだね。埃及の最古の歴史がなり立つて王の榮えある帝業を數へあけたのはそれであるといへるし、これと同じやうに東洋や希臘や羅馬などの金石や木材に刻せられた條約文であるとか、戰勝記念碑であるとか、法律などの記事でもみんなさうだと云へるね。で、かうしたことはより實際的な宗教や祭祀や政治上の目的のために、ある事柄を一途に固守してこれを安らかに後世に傳へようとすることによつて密接に連絡するやうになるのだ。あだかも東洋における多くの國王や官職にある者の表、とくに日本でなら民族の系譜である、たとへば清和源氏とか嵯峨源氏とか伊勢平氏の系圖がそれである。それから西洋では雅典における執政職の表や羅馬の祭司職の表、中世期のいろん

な曆であるとか教會の監督や律院の庵主の表の如きものなんだ。

民族の異なるにしたがつて歴史に對する感覺や其を表現する才能などにも非常な相違が感じられる、高級な文化を持ちながらも原始的形式の階段に立ち停つて、それすら不十分に發達させただけだといはれる印度人のやうなものがある。そうかと思ふと、物語風の歴史を發展させることによつて此の形式をすつと豊かに表現して聽て次のより高い歴史の階段への導しるべをつとめた希臘人と羅馬人とがある。あの「歴史の父」といはれたヘロドタスは紀元前四四〇年ごろに希臘人と波斯人の戰爭を書いて物語風歴史の代表作をなしてゐるのでも分からうと思ふ。』

(二) 實用的の歴史

B『この階段の觀照方法を逸はやく自覺しつゝ表現したのは、ペロポネサス戰役史をものした雅典のツキディデス Thucydides であらう(紀元前四六〇—四〇〇年頃)。予の著書が役立つべき目的は過去の事物について明確なる表象を與ふること、及び之を以て將來人事の進展に伴ひてこの事物と全く同じやうに、若くは類似して起り得べき事物に就ての表象を與ふことにあり』と彼は云つてゐる。すなはち、彼は世の中の人が類似した政治上の形勢に對して過去の歴史

的知識の泉から實用的教訓を汲みとらうとすることは、なべての人の本質と行爲とが一般に類似してゐるといふ點で可能でもあり根據づけられてもゐると説くのである。

こんな風にツキデイデスは教訓的歴史の階段の固有性といふべきものを特徴づける記述をしたのだ。』

A 『ちよつと……教訓的歴史の階段といふのと實用的歴史の階段といふのとは同じ意味なんだね。』

B 『さう思つてよいね。この階段の歴史觀になると實用的な傾向に囚はれてしまつて個人が一般に抱くところの人間の動機や目的に向つてその歴史認識といふものが指し向けられるやうになり、そこに活躍する人物の情慾や思慮の點から凡てを説明しかけるのだ。だから、人物の動機や目的に對する豊かなる回想であるとか、筆者みずからの時代に對するその應用であるとか、そのほか道德化や政治的判斷といふやうな特徴を持ちこそすれ、また歴史的材料の内的な原因や條件などを深く究めることによつて全然本質的な進歩をもたらしたとはいふものの、この實用歴史といふものぐらゐひどい缺陷をもつた歴史觀はないだらう。』

A 『それはまたナゼだらう?』

B 『かういつた立場になると、心理的動機の觀察ばかりやるのだから、その歴史を書くところの先生が獨善的な單なる觀照法に直接に支配されすぎるの餘り動もするといやに道德臭を帯びたり政治的に偏したりする。とくに愛國的な傾向を取つてこれ見よかしに人に教示しやうといふ淺はかな形式に引きづけられるからなんだ。かうした一切を舉げて單なる一個人の衝動から説明しかける見方は、偶然な出來ごとや副屬的な動機を必要以上に過信することになり、千代田城八百萬國の公方様の運命さへ、人種的優劣や經濟的素因に起伏する諸民族の興亡盛衰すら一人の奥女中の〇〇によつて左右されるとまでに名斷されるのだからね。』

A 『クレオパトラの鼻が胡坐をかいて居たら埃及の歴史はどうなつたんだらう、なんてヘンに氣をまはす奴もその亞流なんだね。』

B 『さうなんだ。』

此實用歴史といふものはある文明民族のうちに個人の意識といふべき主觀性が勃興する時代に現はれるのが通例である。それは先づ希臘に榮えたといへよう。即ち、ここでは今までの古い階

段の形式である年代記のかたちを採り更らに傳記とか覺書とかいつた新しい形式で現れてゐる。それから羅馬ではアウグスツス時代からずつと特殊に培はれて來たので、タキツス Tacitus (紀元後五五——一一七) の書いたアナリスに於て典型的作品を得たのである。この風はそののち衰へゆく古代文化のうちにもなほ絶えざる絲のごとき連鎖を辿り、しかも局部的には今いつた様なもろくの弱點を示してゐる。くだつて中古になると一部分は物語風や備忘録的歴史といふ一ばん下の階段に逆降するが、一部分はかの羅馬の歴史著作の形式を採りながら、これに新しい基督教の觀照法が入りこんで來るのである。この觀照は、すぐ後で説かなければならないのだが、發生的歴史認識といふものの最初の力づよい萌芽を意味してゐる、その次になつて來ると實用歴史は若々しい潑刺たる清新さで表現される。てふど歐羅巴に散在する諸民族がそれぞれの自覺を嵩められて來て、めいめいの國民性を完成しはじめ彼等みずからの母國語を藝術的に用ひて自分たちの親しく體驗した事柄を在りのままに表現し得らるる時代となつたからなんだ。

當時絶大なる個人の權力と放從さとが自由氣儘にはたらいて政治上の變化を決定した。それがために歴史上の事件の経過が事實の上では個人の一身上の動機とか目的によつて決定されるやう

にまで見える。そんな時勢であるから此處にもかしこにも極めて豊富に實用的歴史がものされて來たのである。まづ佛蘭西では十三世紀から十七世紀記までの覺書乃至覺書的年代記となり、十四世紀以後では伊太利に於ける各地に割據した小さな獨立王國の朝廷と、黨争のために分裂してしまつた自由國との年代記となり、最後に十七・八世紀の小國分立の状態にあつた獨逸でもことごとくさうであつた。その頃の人達は歴史とは事件の知識であるといふシンプルな定義のもとに、政治生活においては何が有益なのか、それとも有害なのか、いつたい何が善い幸福な暮らしに役立つのであらうかを學びださうとしたのである。しかもこれと平行して、來るべきより高いより深みのある歴史の把握に達するもろくの先行條件といへるものが次第に成立して來ていつのまにか有力なものとなり遂に次の新しい歴史觀を十八、九世紀の交にあたつて勃興させたのであつた。

(三) 發生的な歴史

B『この階段において創めて歴史がホントウにおしもおされもせぬ一個の科學として成長しはじめたことを祝福してくれたまへ。ここに於てはじめて歴史家は特殊的に因果聯絡するもろく

の事實の一つの固有なる知識の領域として斯くの如き材料の純粹認識を自らの考察する目標とすることになつたからである。さうしてこれ等のいろんな事實とその認識とに關聯をあたへるものは國家と社會における有りのままなる現實の人間にむかつて適用せられたところの「發展」の概念にほかならないのだ。つまり、個々の歴史現象はいかにして發展して來たのであるか、それはどうして現在あるようなものにまで生成したのであるかといふことを知らうとするのである。この階段がこんなにおくれ馳せにやつと發達しかけたといふことは今から考へてみるとそれは不思議にも思はれもしやうか、だがそれはた易く説明されようと思ふのだよ。』

A 『今いつた「發展」の概念といふヤツがわからないね？』

B 『うむ、そもそも發展の概念たるやだね、われわれからすればむしろ分りきつた事のやうであるけれども、もともと決して人間といふものの精神のなかに生れながらに備はつてゐた譯のものぢやない、ことに人事を一つの發展の産物として、即ち内と外にある雜多な原因の統一的關聯においてそれを把握するためには、ずつと高度な全精神文化が必要であり、そのためには先づ形づくらねばならぬ精神上の先決條件が尠からず要求されるからなのだ。第一に先づ、人間といふ

ものの實在の統一性に關するところの觀照が存在しなければならぬだらうよ。どうかといふに統一的に見られてこそかくの如きもののみがお互に關聯しあつて發展するのだと考へられるからね。古代文化の頂上では、なるほど人類の統一性に關する觀念が缺けてゐたといふのではないが、しかも人間の文化共產社會といふカブよい表象の時期に達するまでには、その觀念は内面的な深刻な度合ではまだくこれで充分であるとは云はれなかつたのだ。

かくの如き風潮にあたつて出現したのがクリスト教であつた。ここにおいて始めて著しい思想の變化が行はれた。墮落——解脱——裁きの日といふ共通した運命にたらなる神の子としてあらゆる全人類の連帶てふカブよい思潮をもたらししたのである。洵に中古の人々がかう云つたイエスの思想にすべてを捧げてゐたればこそ、この人々の歴史觀が古代のそれに比べて觀念上の進歩をなしたといふことが認められるのであらうと思ふね。人々の宗教的な思想は、つまり超俗的な神々しい關心の標準をたててゐるのだから、その面前にあつては有爲轉變のうき世の存在は消えうせて虚ろとなり、それは何の價值もないものになつてしまふのだから。神の國の擴びりと其の榮えとのためには帝國がひたすら主たる神の役所として存續さへしてゆけるなら、それはローマ人

たるとゲルマン人たると問ふところではない、どんな人間が歴史の檜舞臺を占めようとも、それは我等の關はり知るところに非らずとまで思はれたのであつた。さういつた風で、中古が第二の觀照をたどることは尙さら容易な事ではなかつた、といふのはこの觀照は發生的考察法にとつて一個の先決條件でもあり且つ古代にもホンの不十分に存在したもので、つまり一切の人事關係のなかで一つの繼續的な變化が行はれるといふことである。中古の人々がこの事をしばしば看過してゐたのは僕らの立場からするなら實際解しがたい事だが、けれどもその時代の人々の心のうちには時代の遷り變りやその文化といふものの差別については何等の表象なるものがなかつた。だから當時のフランク人を遠いくむかしの、おまけにすつと懸けはなれたトロヤ人の後裔であるとしたり、獨逸の名だたる貴族であるカトゥリ家を目して羅馬のカトー家より出するとなしたり、きはめてかけ離れた時代々々の法律や制度をカール大帝のものに歸したりするのだ。かういつた例證はまだ他にもたくさん擧げることができよう。近いところで十八世紀になつて未だこんな風な時代錯誤に出合ふことがないとはいはれなかつた。第三に、人間のさまざまな關係や活動が内的な因果聯絡や交互作用といふものの中に立つてゐるといふ新しい見解は、きはめて除々にひ

らけかけながら創めて作りあげられたのであつた。即ち政治的變化が經濟狀態や社會狀態といふものに對して、どんな影響をもつてゐたのであるか、あべこべに宗教や藝術や科學がそれぞれの間に、もしくは國家や社會における他の事情に對して、どんなに活潑なる關係にたつてゐるのか、國內の風土や地味が諸民族の性格とか生業とかに、いかなる影響を及ぼしたのであるか等を認識しやうとする行きとどいた觀察である。

今言つたやうな文化的影響の現象ともいふべきものは、たとへ古代の歴史家にせよ卓拔した人たちの中では、よく實生活に對する炬のごとき史眼を開いて、すくなくともその最も明白なるものを決して見誤るやうなことはしなかつた。ところが、中古ではさう云つたものは殆ど全くいつてよい程見失はれてしまひ近代に至つてやつと再び把握されるやうになり、觀察されだしたのだ。僕らはこの觀察法が何をもちたのかといふことを更に觀察する必要があるのだね、近ごろ比較言語學であるとか比較人種學であるとか其他のいろんな比較科學といふものの研究や成立がはじめて可能となつたのは、この觀察を基礎としたからであることや、人類地理學のやうなすべての専門的な知識や廣汎なる文化史といふものの新たに成立するやうになつたことも、どれ

もこれもみんな一樣にこの同じ觀察からスタートをきつてゐるのだといふことにすこしでも注意の眼をくれば思ひ半ばに過ぎるといふものであらう。

中古といふ時の潮が流れていつてからこの方いま迄お話したやうな人間の歴史のうちにおける廣びろとした、しかも深刻なところの把握に缺くことのできないあらゆる先行條件が種々な異つた方向から精神文化と科學とのゆき渡つた進歩と關聯しながら、いつとはなしに充足されて來るのであつた。さうしてとう／＼十八世紀の後半から例の發生的把握といふ觀照が勃興するやうになり、十九世紀からこちら、ずつと學界を風靡するやうになつてきた。この把握法は其時代の精神的な根本觀照と非常に密接な關係をもつて、その爲め自然觀察の領域にまでも適用せられるといふ風に、いたるところその豊かな創造的作用を與へて科學的研究を活潑ならしめた。それに伴つて仕事をする手段もだん／＼と擴まつてきて着々とその効を奏する、つひにそれは史學研究法の完成といふやうな段取りとなるのであるが餘り話し疲れて來た、今日はまアこの邊で一息さしてもらいたいね。』

A『すまないが、折角千里を遠しとせずしてやつて來たのだからモ少しおねがひする。』

B『殊勝のいたりだね、ぢやモ少し………儲て今では發生的な見方が世間一般に認められもするし行はれもする歴史觀となつたのさ。』

A『モウそうなつてくると前の物語風の歴史の階段や教訓的史觀といふ二つの階段なんかで、問題にならんといふわけなんだね。』

B『さう許りとは云へない。いままでの歴史階段がそれよりかすつと高い自分を支配する關心の中へ呼吸され消化されてゆきながら隸屬してはるるもの矢張りそれ／＼の歴史階段といふものはそれ自身存在理由をもつてゐるわけになるからね。いちじるしい人間の運命のほどをかくかくであつたと心に畫きたい、さうして目の邊り見るやうな事實そのものの表現に接しやう、自己を美的に教養したい——てふど歴史觀の發達を語る最初の階段に相當した欲求が僕らの胸のうちを往來するのは正當である。同じやうに個々の事實を記録にとどめて榮えある記念のために歴史材料を普ねく記憶にのこしたいといふ欲求もきはめて當然である。また政治家や科學者や藝術家はめい／＼の専門に對する教訓を實用的階段の歴史の中から汲みとらうと欲するであらうし、時代のうら若き青年や多數民衆にとつては歴史は價值高き教養の資料ともならう。だから、いづれ

の土地いかなる時代においても二つの歴史階段のどれかにきつと特別な注意をはらつた歴史的作品は存在するであらうし、又存在しなくてはならない。恐らく發生的把捉法の立場からする作品だつてきつとこれ等の關心のどちらも忽せにすることはできないだらう。しからば純粹な材料的關心や美的關心は、材料の概観的な精密な再現とその興趣ゆたかなる物語とで代表されてるだらうし、教訓的な關心は事件をして深刻に心理的に動機づけることによつて代表されるであらう。しかし、これ等のあらゆる場合があるにも拘らず、では何が一切の標準になるのかといへば、それはいつでも發生的立場であるとはつきりと答へなければならぬ。

僕はここまで話しあつてきて此の現代的史觀がきはめて遅々たる足取りで發達してきたこと、それが其時々の精神文化や異つてをる時代の世界觀と、どんな風にして手をとり合つて歩ひて來たかを見た。今では發生的根本把捉法の見方で、あらゆる一致ができてゐるのであるがしかもその間には非常に深く突こんだ歴史考察の差別、といふよりもむしろ對抗が存在してゐて、それに従つて歴史科學の本質は何であるか、歴史學の職能はどうであるかが定められるわけだ。ところで實をいふと今の史學界の現状では、世間の誰にも承認されるほどの、いはゞ統一的世

界觀といつたものを持つことができるまでに吾々は恵まれてはゐない。それは苟しくも始めに云つた發展の概念がその中心點をなしてゐる科學の場合では必然的にそうなんだ。實際、この概念はまことに面倒なものであつて、それ丈にまた價值ふかいものであつて、現在尙しきりと論争の種を蒔いてゐる始末だ。だから僕らにとつて一番肝心なのは何であるか？ それは異つてゐるさ。まぶく見解を鋭く公平に概観することによつてそれらの見解の偏頗や矛盾や錯誤から超越しつつ廣い晴れやかな創造的展望のうちに、今なほ雜草に蓋はれ迷妄に患はされつつある歴史が原の魂を一途に、傍目もふらずに開拓することにあるのだといへるね。」

B「さう云はれて見ると、なにかしら僕の眼界も開けかけて來たよ。はじめに史眼といふものを近眼八度の中へ巧妙に植へつけられたんだからね。」

A「お世辭はよしたまへ。」

三 歴史哲學

A「こんどは歴史哲學について教へてもらいたいと思つて來た。最初に話したやうに妹からせ

められた例の「リツケルトの歴史哲學」なんてやつなんだが皆目わからなくつて弱らせられるから特に馬力をかけてお願ひする。」

B 「うむ、そうだったね。僕の方の豫定も昨日のつづきは歴史哲學の順序になるから丁度よろしい。」

A 「歴史哲學なる語は誰がとなへだしたのだらう、その時代はいつごろだらう？」

B 「歴史哲學 die Geschichtsphilosophie」といふ言葉を最初につかつた人はボルテールで、一七六五年に出版した「諸國民の道德及び精神に就て」のうちで人類の文化を世界史的に哲學的に考察するといふ意味で「歴史の哲學」なる文字を用ひて居るのだ。しかし歴史哲學の一般的な概念どほり此の「歴史哲學」が用ひられたのはヘルデル Herder が一七八四年に著した「人類史の哲學考察」の序文に現はれた時からだらうよ。」

A 「いま、君のいつた歴史哲學の一般的な概念どほりと云ふとどんなことなのか？」

B 「歴史の原則と問題とを取扱ふところの知識分科といふことになるね。」

A 「なるほど。」

B 「この意味において歴史哲學はそれ以來ますます獨立した一つの研究領域となつて來た、この領域といふのは、法律哲學とか宗教哲學とかのごとく哲學に切り込んでゆく専門的な根本問題を取扱ふものなんだ。このためには哲學の専門的知識も歴史の專攻的知識も、どれも同じやうに必要になつてくることは明白の理であると思はれるが、それなのに各自の領域を取扱ふ兩派の代表者達の多くはお互に内的な接近をたどらうとはしないで、めい／＼得手勝手な研究に没頭して來たのであつた。この傾向がいく分でも變つて來るやうになつたのは、やつと極く近頃のことである。歴史家にとつて歴史哲學は決して無用の長物ではない！ 若しもある學問の研究者が自分の特殊的研究においては何等一般の觀照といふやうなものとは關係したことでないと空想するならばそれは瞭かにその學問にとつての致命傷ではあるまいかと思ふのだ。なるほど歴史哲學といふ言葉や概念はまだ／＼やつと近頃のことであるかも知れない。が、事實のうへでは歴史哲學的考察なるものは恐らく歴史そのものとともに古くから存在するといつても過言ではないと僕は想ふのだ。なぜなれば、たとへ曖昧模糊たるにもせよ何等かの歴史的事實の一般的の表象といふものは假りにも歴史を取扱つてゐるほどの誰にでも起り得ることだからである。かういつた表象から次

第にまづ獨立した考察が生れるようになってくるし、次にはその特別な著作といふものが生成して来て、とう／＼之に附屬した種々な問題が科學的な研究の對象として一般的に騒がれるやうになつてくる。十八世紀の半ばから歴史哲學に關した文獻は絶えず増加して大きな擴がりや深い内容とを有つまでに成育するやうになつた。

歴史に獨立した意味が認められるようになり、人類生活のほんとうの目的がこゝに發見せられて「世界」の觀念といつたやうなものが人間の「自由」といふものとともに理解されて來たのは十八世紀であるけれども、それ以前の哲學思想においても勿論後世の思想を培つたほどの痕跡は充分にみとめられなければならないと思ふ。

古典文化の時代ではあれほど盛大な哲學の體系が建設されながら人類の事業といへばたゞ大自然の一つの過程にすぎないものであると考へられてゐたのであつた。したがつて歴史上の過程とても矢張り永劫に消滅し、創造と破壊とを交互にするところの大きなリズムとして解せられてゐたわけである。「人類」であるとか「世界」であるとかいふ考へが最初に自覺されてきたのは矢張りキリスト教思想からであらう。自然物の時間的經過といふ事に對して「歴史的秩序」といふ

ものが新たに見出されて來た。キリスト教の思想によると、歴史は唯一のたつた一回かぎりの過程であつて、神の意志が人類の生活を律し人に恵まれた束の間の生命に永遠の默示があたへられた。歴史のうちに住む人類には一つの偉大なる課題が課せられた。さうして此の解決は重要な結果を導き出すやうになる。こゝに自然の韻律とはまつたく異つた倫理的な事業が認められるかくて凡てを統御するところの宗教は政治史にすらも宗教的の意味を與へたと云はれて居る。』

(一) 神政的史觀

B 『歴史哲學の最古の最初の體系はアウグスティヌス Augustinus の「神國についての二十二卷」によつて述べられてゐる。(紀元前四一三——四二六)この體系は中古を通じて行はれ今日では正統カトリック教界においておびたゞしく代表されて居るのだ。』

これによるとだネ、始めに「神の國」と「惡魔の國」とが天上と地上とにあつた。』

A 『ヨシたまへ、おとぎばなしではあるまいし……いや、しかしまあ、われ／＼日本人でも子供の時には、やつぱり「高天原爾神留坐須たかまのはらにかしつまりす」てなことを有難たがつたり事實信じたりしたのだから、御誓文の文句ぢやないが智識を世界に求めて國際的に恭しく謹聽するとしようかね。』

B 『さてとよ、ここに悪魔の國となんいへるは人類の遠祖天國を追放されたまひし時より地上にひろまりにき。とでも云つてよいところだね。カインはこの悪魔の國の市民であり、アベルと神の恩寵によつて選ばれたる人々々が天國に住むだ。アジアの至らざるなき暴虐な政事とローマ帝國とによつて悪魔の國は彌がうへにも權威を振ふのである。この時クリスト現れたまひ新たに神の國を地上に創建しやうとした。教會は即ち神の國の體現であつて、それからといふものは多くの戦が悪魔の國との間に行はれ教會は常に勝利を得て内外に向つて勝ち擴がる。あらゆる民族もいかなる個人も神とその命に従ふ者とはことごとく神の國の戦士となり、従はざる者どもは相踵いで悪魔の陣營にと赴くのである。』

神の國の表象は愛の平和であり我自ら世界及び神との圓滿具足にある。悪魔の國は内なるもの不安・周圍との軌轢・神とその命令とに抗する反逆をもつて烙印づけられてゐる。

時の終りが近いたとき、悪魔は全力をつくして戦慄すべき魔術によつて神の國の轉覆を企てる。しかしながら教會はよくその味方とともに最後の試練に打勝つて凱歌の聲を揚げる。すでにして淨罪の期は至り裁きの日は神の僕たちを永遠の至福において神の國にみちびき、罪の子は永遠の

彈劾を受けて地獄に墮る。かくして人類史の全内容と價值とは一つの超俗的目的にもとづいて決定されてゐる。地上の富が神の御旨に従つて用ゐられる限りに於いて意義あるものとなるやうに、人類の事業はたゞ神の國につくすことによつてのみ崇高なる意味が考へられるのである。このことはまた國家に就ても同様である。國家は祖先以來、墮落のために頼る邊なくなつた地上の懺悔者たる無秩序なる住民を神の定めにしたがつて統治すべきものであつて、政治家や支配は謙遜にこの任務を完うしてはじめて基督の役人として天國の住民となることができるであらう。でなかつたなら、彼等もその國土も徒らに悪魔の跳梁するところと爲りをはるであらう……と云ふのだ。』

A 『ナンだか有がたいやうになつて來たよ。』

B 『さて此の思想から法王權なるものが段々と地上におけるクリストの代表、教會最高の意志と命令の權化と見做されて來てから、苟しくも正當なる法王が適法によつて發布し給ふ至上命令にむかつて本氣で反抗するやうな國家や君主は悪魔の傀儡であると見做さなければならぬやうになつた。』

A 「なるほろ」

B 「即ち「使徒たる父」に對する従順は神に對する子としての従順に相當し、亦かの神聖なる最高主權に服従することは、それは奴隸的服従ではなく、これこそ眞の基督教的自由であることになる。たとへ此の主權が政治形體のそれ／＼の變化にしたがつて一種の諸國を包括する世界國家における最高統卒權の形で發現しやうとも、所詮は俗界のすべての發展は一人の大いなる宗教的思想をもつて定められてあるのだ。一切の政治上の變革や一切の文化の所産といふべきものは之に比べると唯相對的の價値と存在とを有するのみである……。」

A 「もうそろ／＼アてられさうだね。」

B 「まア謹聽し給へ、かう云つた獨斷的思想が一定不變的であるからといつて、それがために世の中の歴史を普遍的歴史認識といふものの進歩とともにひろく且つより深刻に顧慮して見る事がまるツ切り無いといふのではないのだからね。現に正統カトリック教會側の歴史家たちの提法が今に至るまで數世紀間のいろ／＼な進歩に適應して發展して來たのは事實なんだからね。この歴史把捉法がほと現代の特殊な方法的要求に適合した歴史研究の水平線に立つてゐる事は識

者の認めるところでもあるし、それはまた文化史的な博識達見の高度に樹つてゐることは一八九一年に公けにされたゲオルク・グルッパ G. Grupp の「文化の體系及び歴史」に現るごとくでもあるね。しかし悲觀することには此の歴史把捉法を特徴づける旗じるしたるや彼れグルッパによれば、われらは聖アウグスティンとともに歴史をして神の國と地の國との平行發展に分ちえて毫も過まれることを知らないのである。我等はまたアウグスティンとともに彼の俗界における文化を大いに尊重はするけれども苟しくも歴史の本質的なものを、その價値あるものを、そこにありとはせずたゞそが宗教的發展のうちのみ存在するとなすものである。ことを其著を通じて、こと更らしくあらたまつてゐることである。

クリスト新教の歴史觀といへども、やつぱりアウグスティヌスの根本思想から一步も踏み出してゐない。いふまでもなく新教の歴史觀はローマ法皇が神の名代として政治することを最早や承認しはしない。第五世紀の教父たるアウグスティヌスとせずと後世に作りあげられた神の支配といふ形ではまだこれを知つてゐなかつたのである。だから新教の歴史觀は俗界クリスト教政府であるところの國家に對して、天國への導きにおいてより獨立的なる位置と意義とを與へてゐる

るのだ。それと同時にこの史観は俗界なるものの生活を、従つて文化財そのものを一層たかく評價することに傾いて居るのだ。アウグステイヌス自身でさへ、それがために神の子の道から離れさへしなければイエスの賜物としての俗界の財物を享樂することを決して排斥してはゐなかつた。いろ／＼な時代の一切の發明や文化獲得にあらはれて人間の内に働く神性の奇蹟を感受しないのではなかつた。彼の見解はこれらの浮世の文化財を實際の上で利用することにおいて充分自由の餘地を與へた。それに應じてカトリック正統派も新教正統派もいづれもお互の内部に把握の廣いのもあり狭いものもあつて、めい／＼差別があるのを僕らは發見するんだね。」

A 『しかし君、君の云ふごとく二派を比較したなら、どつちかと云へば新教の方がずつと囚れない文化尊重がしのばれて、どうせ耶蘇くさいことは鼻についてもだ、やゝ頼母しいね。』

B 『ご同感だよ、だが、どつちにしたところが二元論さ、惡魔に體現される物質の原理とイエスにおける神の原理との對抗戦そのものが歴史の内容たることに變りはない……。』

A 『やがて人々よ、神の裁きの日は來たるのである。物質的なもののみが現世から離脱されて行く。洵に天國は近づけり！アーメンといふ段どりになるんだらう。』

B 『いくらアンチ・クリスチャンでも、いささか藥が利きすぎたといふものだ。しかしまあさう云つた君の憎まれ口が、そつくりその儘、この二元的神政的史観の進動目標とみればたいした間違ひもなからうて。』

(二) 唯物論の歴史哲學

B 『十七世紀からこちら其頃行はれつつあつた哲學の思想や諸種の自然科学や政治上社會上の理念が結合しあつて、自然的因果の統一的聯絡において、世界を認識しやうとつとめたのであつた。もちろん「神」てふ最終にしてすべての總てであるといふ原因を必ずしも排除したといふのではなかつたが、なかでも一群のラジカリストは、無生物の自然現象における機械的合法性の發見によつて實證された左傾的見解へと馳せたのであつた。』

それによると、生あるところの自然も、たとひそれが人間であらうとも、つまりは一つの機械に外ならぬ。それは機械力によつて創められ機械的刺戟によつて知・情・意の活動を惹きをこすのだといふのであつて、その結果は一切の神の信仰や、すべての獨立的精神的衝動力の所説とは文字どほり氷炭相容れない反對の立場をとるに至つたのだ。同時に彼等は神の定め神の思召しとま

で主張せられる不合理なる絶對論的の現存社會制度に向つて猛然として反抗しこの秩序の基礎とせられてゐる人生にはアダムの墮落以來罪障の弱味ありといふ思想を否定するばかりでなしに進んで人間はその本然において自由であり、平等であると叫んで、この自然法は總ての人間をでき得るかぎり満足させるやうに實現さるべきであると説くのである。フランス大革命に於て實にこれ等の理論は勃興し、この機會に乗じて人生の發展といふことに對して徹底的に適用せられたのである。この傾向の歴史哲學は、卓越したる個人や政治上の事件などを過大視して來た是までの史觀の風潮に反目し、主として社會的衆團及びその文化事業を觀察の對象に入れ、歴史を機械的自然法則のそれぞれによつて説明し、そして始めて歴史をしてホンものの科學にまで高めなければならぬのだと考へてゐる。』

A 生物學的史觀

B 『自然科学の勃興は單なる方法論上の問題における歴史の考察にのみ關係するばかりでなくさらに自己の研究の範圍内でも一種の歴史觀といふべきものを構成するやうになつてしまつた。

しかしここに取扱はれて居るのは、あくまでも生物學上での問題であつて、外觀上の類似以外

に別段これと云つて歴史の研究とは關係のないものであるが、しかしその生物學上での問題が遂に自己の研究範圍を越えて、直接、歴史觀の上に影響を與えるやうになつたのだ。さて生物學は自己の研究範圍内で歴史的發展といふことを問題にするやうになつた。さうして、かうした意味から人類發展の經過を統一的に説明することを試みたのであつた。このことから生存競争や自然淘汰や適者生存や遺傳や順應などの根本法則と根本概念とを有つたダーウインの生物學上の進化論を、國家や社會における人類の發展に對して適用しやうとする歴史觀が生れ出すやうになつて來たんだ。』

A 『なるほど』

B 『例へばだネ、一八七五年に出たヘルワルト Friedrich v. Hellwald, の「自然的發達に於ける現代までの文化史」や、オット・ゼーク Otto Seck の「古代没落史」などは、その實物見本だと云へるね。ダーウインの進化論それ自身では、無神論的たること唯物論的たることを要しない。その諸法則はまことによく精神的的本體なるものの作用がそれに於て實現される形式であるとも見られてはゐる。しかし、自然並に歴史における諸現象の説明原理として、この論の適用

といふことになる、その論據は常に「唯物論的」であるといつて差支へないだらうと思ふ。

B 經濟學的史觀

B 『生物學上の原理と共に經濟學の原理を基礎として物質上の問題を中心とする新しい歴史哲學が萬雷の如き聲を上げた。いふまでもなく Karl Marx の唯物史觀がそれである。

スペンサーといへども、タルドといへども、ヴントといへども、社會主義運動や、その歴史的機能や、その進化や、その勝利について豫見することができなかつた。これに反してカール・マルクスのみが、獨りこれを豫見し得た。もしも知るといふことが豫見すると云ふことであるならば、マルクスは最もよく知つたものといふべきであるとなして、フランスの共産主義者で知られてゐるラボポール氏の如きは、彼を稱讚して「マルクスは基督を征服せり！」とまでいつてゐるよ。』

A 『同じ穴の赤い狼だらうからね。』

B 『河上博士などはマルクスの「唯物史觀」はむしろ經濟的史觀といつた方が當つて居るし、彼の歴史觀は之を名付けて社會組織進化論といふのが、いちばん誤解を避けやすい名前のつけ方

であらうと云つて居られる。』

A 『なるほどね、だがしかし、マルクスが折角「唯物史觀」と稱へだした以上だ、なにも後世の學者河上肇ごときが、勝手な横槍を入れて重要な革命的學說の名稱變更など試みるなんて沙汰の限りといふべきぢやないかね。大體この頃のハカセなんて奴は、大した獨創もない癖に、大きな面をしやがるんだから蟲が好かんね。』

B 『君一流の憤慨には毎度ながら中てられるね。いや、これは僕の前置きが少々足りなかつたせいもある。ともかく河上肇なる人は唯物史觀を唱へることによつて唯物史觀の價値を尠とも半減する人であると思ふ。僕は平常思つて居るのだが、然し、ここでは君の抗議は全く河上博士にとつては冤罪であると思ふ。それは決してマルクス自身が「唯物史觀」なる名稱を用ひた譯ではない彼は之を以て自分の研究の結果であり、その指南者であるとは云つてをるものの唯物史觀とは言つて居ない、唯物史觀といふ名前はマルクスの親友であるエンゲルスが一八七七年に始めて用ひたもので、それから一般的に行はれるやうになつたのさ。この歴史觀は一八四八年の「共産黨宣言」にも、一八六七年に第一巻を出した「資本論」にもその根底をなして居るのだが、公式的に表は

れてゐるのは一八五九年の「經濟學批判」の序文の中なんだ。

A 『ちついつた譯なら一向構はぬがナ……。』

B 『さて、社會主義の歴史觀たる唯物史觀はマルクスに創つて、エンゲルス Engels、ラファエル Lafargue、ユーベル Bebel、カウツキイ Kautsky 等の人々によつて完成されていつた。ヘーゲルの哲學の流を汲みながら、彼等はヘーゲル流の意味に於てこれを否定し、しかもその思想の生々潑潑たる要素を採り入れて發展せしめたる點に於て、これらの人々は眞のヘーゲルの後繼者であり、出藍の高弟であるとも見られる。唯物史觀に據るとだね、法律といふものは經濟關係の承認批准に過ぎない。道徳はこの經濟關係といふ社會の結合をば人間のある種の動機を以て鞏固安全ならしめる所以のものに過ぎない。宗教は來世に於ける幸福を語つて壓迫せられて居る多數の弱者を昏睡せしめつつ聽て彼等を服従せしめる。藝術や科學になるとこれを經濟的下部建造と結び付けてゐる有機的紐帶を見出すことが困難ではあるが、かかる紐帶の存してゐること、つまりこれ等の經濟關係によつて決定せらるるといふことだけは確かなわけである。換言すると、物質的生產關係こそは、意識・理念・人間の共同生活における一切の精神的生活過程、國家及び社會に

おける一切の關係、事變の成立や形成を根本から決定するところの衝動力であると斷定されるのだ。

A 『むづかしい言葉使ひは禁物だ。第一、物質的生產關係つて云ふことからして分らないね。』
B 『この關係といふのは、人間の力でどうにでもできる自然生産物と、これを利用するための技術上の手段とを本として、生活必需品をいかに供給するかの方法と、その程度や、生産物がどんなに専有され、分配され、消費されるかの方法と程度をいふのだ。だから生產關係は單に經濟生活を限定するばかりではなしに、また民族生活の他の存在にも影響するのみでなく、端的にそれに相當する思索・信仰・法律・政治・社會の造り上げ全文化の形式までも創り出し、しかもこれらのものが最早その生產關係の事情に相當せぬやうになれば、これ等の形式を粉碎し絶滅させる。これまでの全體の歴史は、實はこの生產關係の支配を中心に旋廻して民族闘争や集團闘争の形態となつて現れて居る。それらの闘争の眞の目標は、その參加者には多くは意識されないで、當時行はれる不都合な生活事情や社會制度の辛さ耐えきれなさは、まづそれ自身の問題として感ぜられはしないで他の領域である憲法・政治・宗教などの範圍において現れる。このやうにし

て、一切の歴史発展の最終の根拠たり、また永久にしかくあるべきものは経済上の諸原因である。さうして歴史が科学であるかぎり、歴史の使命はいつでもこれらの最終の根拠を探究し且つ表現することにあるとしてゐる。だから経済學的唯物論は、その一派の人たちに従へば唯一の「眞の科学的」なる歴史考察法である。さて社会民主主義的な観照法によると、ダーウキンの進化論の諸原理が社会生活に適用される點において、この論を眞向から大上段に排斥してゐるよ。」

A「おなじ唯物主義者であるのに、それはまたどんな因念からだらう？」

B「容易にうなづけるぢやないかね、何故なら、いふまでもなく生存競争の原理は人間の社会に於て自由競争を是認することになるからである。」

A「さうすると自由主義・個人主義に立脚するブルジョア経済學の承認、資本主義社会を謳歌することになるんだネ。」

B「だからさ、自由競争は實に社会民主主義にとつて不倶戴天の敵となるわけぢやないかね。で、この主義がダーウキンの進化論を承認するのは、たゞそれが動物生活の説明の場合だけであつて、歴史の實際生活の上では個人の自由競争を絶対に排斥してゐるのだ。この連中の考へて居

ることをこの連中の言葉でいふと、従来行はれてゐる歴史は「市民の」歴史であつて、たゞ市民を指導するといはれる英雄豪傑だけを取扱つてゐる。實はかくの如き人物はたゞ「経済上諸條件の奴隷」たるに過ぎない。それを主人公として深くその研究に這入りこんで行く歴史は、歴史の學問を文藝の領域に逐ひやるのであつて眞の歴史學ではない！ といふのだ。」

A「とにかく非常に面白い歴史觀だと思ふね。さうつと君から聽かされたことを要約するとザツとこんなぢやないかね。――

人類共存のあらゆる生活現象、意識とか觀念であるとか、國家社会に於ける種々な關係のなりたちを根本的に規定する原動力として物質上の生産關係が立てられる。この生産關係は單に經濟生活ばかりを決定するでなしに、人類社会の生活様式を規定し、さらに進んでそれ等に適合して、思想とか法律とか、政治や社会組織などのさまざま文化現象が影響せらるるところの形式を決定するのだ。この生産關係の支配權を中心として、これまでの歴史は展開してきた。あらゆる歴史的發展の終極の原因は經濟上の原因である。さうして歴史學の使命は、それが科學であるかぎり歴史的發展の終極原因を求めて之を記述することにあるのだ……。さう云つたことになる

のぢやないかね。」

B「なかなか君の史的頭腦はしつかりしてゐるね。それだけの答辯ができれば秀才の部だよ。その通りなんだ。」

A「くすぐつたい事を云ふね、さて折角力瘤を入れたマルクスの唯物史観だ。これだけではなんだかモノ足らぬ気がする。もう少し話してもらへないかしら。」

B「では君の熱心に免じて少々重複の虞れがあるがもう少しお話しやうかね。」

A「さき程唯物史観が公式的に表れたのは一八五九年の「經濟學批判」の序文であると君は云つたが、どんな具合に書いてあるのだ。」

B「今まで僕が喋つたやうなことが書いてあるのさ、さう云つただけでは君のことだから得心が行くまいから、すこし原文から抜きださうか、

「余はギゾーのため佛蘭西より追放されたので、巴里にて始めたる經濟學上の研究は之をブリュッセルにおいて繼續した。而して研究の結果、余の到達したる一般的結論にして既に之を得たる後は、余が研究の指南車となりしものを簡單に言ひあらはせば次の如くである。」

人類はその生活の社會的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に入り込むものである。而して此等生産關係の總和は、社會の經濟的構造と成るものであるが之が即ち社會の眞實の基礎であつて、この基礎の上に法制上及び政治上の上層建築が建立せられ、社會意識の形態も亦之に適應するものである。物質的生活の生産方法なるものは、社會的、政治的、精神的の生活經過をば總て決定するものである。人類の存在を決定するものは其意識に非ずして、寧ろ之に反し人類の社會的存在が其意識を決定するものである。社會發展の一定の階段に於ては、社會の物質的生活力は、それが從來之が範圍内に活動し來れる所の當時の生産關係、又は其法制上の表現に過ぎざる所の所有關係と衝突することに爲る。さうして生産力發展の形式たりし生産關係は、變じて生産力發展の束縛となる。是に於てか社會革命の時代來たる。經濟的基礎の變動に伴うて巨大なる建築物の全部が、或は急激に、或は徐々に變革し了る今斯かる變動を觀察するに當つては、吾人は常に自然科學的に論究するを得べき經濟的の生産條件の上に起れる物質的の變化と人々が此衝突を意識し且之が決戦を爲すに至る所の、法制上、政治上、藝術上又は哲學上の形態、簡單に言はば觀念上の形態とを區別しなければ勿らぬ。斯かる變動時代をば其時代の意識より判斷せ

んとするは、恰も或個人を判断するに當り、その人が自分自身を如何に考へつつあるやを根據とせんとするに等しく、得る所管に是れなきのみならず、寧ろ此意識なるものは、物質的生活の矛盾、社會の生産力及び其生産關係の間に存在せる衝突に依つて、始めて説明さるべきものである。一の社會組織は、凡ての生産力が其組織内に於て發展の餘地ある限り、十二分に發展したる後に非ざれば決して顛覆し去るものでは無い。又新たなより高度の生産關係は、古き社會の母胎に於て孵化せらるるに至らざる以前に於ては、決して發生し來るものでない。されば人間は常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものである。何故なら凡て問題なるものは、一層正確に之を観察するならば、その解決に必要な物質的條件が己に存在し居るか、又は少くとも其成立の道程に在る場合にのみ始めて發生するものなるが爲である。極めて其大體を論ずれば、吾人は亞細亞的、古代的、封建的、及び現代の資本家的の生産方法を以て、社會の經濟的組織の進化の階段を爲すことを得る。而して此の中、資本家的の生産關係は、社會的生産方法の敵對的形態を探れるものの最後である。——茲に敵對的と謂ふは、個人的敵對の意に非ずして、各個人の生活の社會的條件より生ずる敵對の意である。——併し資本家的社會の母胎内に於て發展したる生

産力は、同時に此敵對の解決に必要な物質的條件を作る。されば人類の歴史の前史は、この社會組織を以て終りとする譯である。

以上の一節は、きはめて重大な問題を、きはめて簡潔な文章で表現してゐるのだ。』

A 『通讀一過ではこまるね。すこし註釋する必要があるよ。』

B 『けだし、社會主義の目的は、ブルジョアジーの社會組織の改造にあるのだから、マルクスにとつても勿論そのことが最初から彼の問題である。だから彼が歴史の研究に志したのも、全くかう云つた問題の解決に資せんがためのそれであつて見れば、その結果生れて來た独自の歴史觀なるものが、實は社會組織變遷觀に外ならないのはきはめて自然のなりゆきであると云ふ人がある。』

A 『社會組織の變遷といふと、社會の仕組みとか、社會制度のうつりかはりといふ意味になるネ。』

B 『さうだ。明治維新の革命によつて、日本の社會組織は、封建組織から今日のごとき資本主義組織にかはつた。維新の前と明治になつてからでは、社會の仕組みが全く變つてゐる。かゝる

社会組織の變遷のよつて以て起る根本の原因は、社会の經濟事情の變動にありといふのが、マルクスの主張なんだ。だから歴史上における個人人の活動であるとか、又は一定の社会組織の維持され持續されて居る期間内において、其社会に發生するところの種々の社会的事件の凡てを目して、經濟的原因によつて説明しやうとはしない。乃木大將が「うつし世を神去りましゝ大君の、みあと慕ひて我はゆくなり」といつて明治帝に殉死したといふのは、歴史上における乃木希典一個人の行爲であり、また、日清戦争や日露戦役とかいふのは、日本といふ國家が惹起した一の社会的事件であるが、唯物史觀は、かう云つた個人の行爲とか社会の行爲といふもの一切に對して、この根本の動機はすべて經濟上の利益にありとなすような説明を敢て試みやうとするものではない。だから經濟的史觀は動機論をなすものにあらずといふことにお氣を留められたいね。」

A「つまりなんだね、社会組織を動かすところの根本動力は何であるかといふこと、そうして其原動力の如何を問題とするのが唯物史觀であつて、人々の内心に立ちいつて其の動機如何を問題とするのではないんだね。」

B「さういつた理けなんだね。さてマルクスの歴史觀にいふところの社会の變遷とはつまるところ、社会組織の變遷であるといふ意味が判つたとすると、しからばその社会組織變遷の根本原因は何であるか、マルクスは之に答へて、それは社会の經濟事情の變遷にありといつて居る。」

A「しからば僕は敢て質問する。それならばマルクスよ、おん身の謂ふところの經濟事情の變遷とはそも如何なるものぞ。」

B「相憎くマルクス先生は五十年の昔、地下に眠つて居られるのだから、僕から代辯しておこう。」

諸種の經濟事情のうちで、マルクスが考へていちばん根本的の重要さを有するとしたものは、いふまゝ迄なく社会の生産力である。社会において種々のものを作りだす力、その生産力の變動をもつて、社会組織變動の根本原因と見たのである。土地が經濟上において重きをなしてゐる時代は、その土地の所有や支配といふことを中心として、封建制度といふやうな社会組織が維持されて來た。ところで經濟社会の進歩に伴うて土地の外に資本といふものが經濟上重きをなすやうになり、社会の生産力——いろいろの物をつくりだす社会の力が、一段と進歩しやうといふ場合になつてくると、封建制度といふありきたりの社会組織が邪魔になつてくる。ここにおいて舊制度

倒潰して新制度勃興することになる。つまりマルクスは、社会組織變遷の原因は、社会生産力の變動にありといつたのではあるまいか、僕はそう考へるのだ。』

A 『さうすると、マルクスの經濟的史觀なるものは、畢竟するところ社会の組織と社会の生産力との關係に就ての一の學說にすぎないんだね。』

B 『しかし「すぎない」といふ言葉づかいは感心しないね。今すこし説明してゆかう。社会の組織は大體に於て、その社会の生産力に順應してゐるのである。社会の生産力が一定の程度に發達すれば、社会の組織もまた之に應じて一定の形式をとる。かくの如く、社会の組織とその生産力とは大體に於て並行するものであるが、細別すると二つになる。その第一期は、社会の組織がその生産力の發達とよく調和を保ち得る時代である。この時代では一定の社会組織がその社会の生産力の發達を助長する原因となつてゐる。しかるにある程度まで社会の生産力が發達してくると、從來の社会組織がそれより以上の生産力の發展のために却つて邪魔になつてしまふ。それが第二期。マルクスが「生産力發展の形成たりし生産關係は、變じて生産力の束縛となる。ここに於てか社会革命の時代きたる」といふのがこのことだ。しかし其の時には、一方に於ては、來る

べきあらたなる社会組織を生みだすに必要な諸要件が、舊組織の下でちやんと準備されて居るのだ。だから社会革命なるものは、これに必要なもろもろの條件が爛熟すれば、必然必至的に實行さるのであるが、若しもその條件が未成熟である場合には、いくらバクダンが飛んでも宣傳ビラが撒かれても、實現されるものぢやないのといふわけだ。』

A 『なるほど、なか／＼ぬかりのないことを言つてゐるね。』

B 『しかし一旦條件が備つてくると、まづ社会の經濟組織が變動し、これに影響されて社会各方面の事情が一變してくる。』

A 『先ほど書取つて置いた「經濟的基礎の變動に伴うて巨大なる建築物の全部が、或は急激に或は徐々に變革したる」といふところなんだね。』

B 『さうだ、例を繰返して明治維新にとると、今までその發達を抑壓せられてゐた社会の生産力が俄に解放されるために、經濟界が急に發達し始るのは勿論のこと、物質界も精神界も社会各方面の状態がまつたく面目を一新して來るのであるが、それがやがて新社会組織の第一期となるわけである。社会組織變動の原因は社会の生産力の變動にありといふ意味は大體以上のごとし

だ。蓋しマルクスが、さう云つた裏面には、社會組織變動の根本動力たるものは決してその社會を組織する個人の思想などではないといふ事が含まれてゐるのだ。マルクスによると、ある社會に一定の生産力があれば、それに應じてその社會における個人と個人との經濟上の關係がきまる。さらにこれ等の諸般の方面における社會組織なるものが、その社會内における一般個人の思想や感情や意見などを左右するものである。だから社會を組織せる個々の人間の精神的意識狀態が、その社會組織を動かすのではなく、あべこべに社會組織そのもの、更らに溯つていへば、社會を組織せる一般の人達の物質的經濟的の生活狀態が、その社會の人々の精神的意識的の狀態を左右するものである。たとへば道德といふことに就てかんがへる。恒産なくして恒心ありといふことは唯大丈夫の土のみ能くするだけであつて一般の民衆になると、恒産なくんば則ち恒心なしといふことになる。だから社會一般の道德を向上させようとするならば、まづ須らく民の産を制して凡ての人に恒産あらしめよ、然るのちに之を驅つて善にゆかしむることにしなければ、所詮甲斐なきことであるといふのだ。尤も、いくらマルクスだからといつて、一般の道德が改善されるならば、社會の經濟もまたそれがために進歩するといふやうに、精神的文明が反動的に物質的

文明の上に影響してゐることも無論否定はしない。若しも一個の非經濟上契機が經濟上の諸根本原因によりて一度世上の舞臺に押し出されると、今は獨立して其周圍にも、しかも經濟上要素に對してさへ、逆に影響を及ぼし得る」ことはそれに違ひないが、然しながらマルクスは經濟的文明をもつて根本的動力と認めるのだ。」

A 『つまり、その點が唯物史觀の著しい特徴なんだね。』

B 『マルクスは、さう云つた歴史觀、さう云つた社會進化論の上に立つて居るのである。だから此の觀方を以つてすると、社會の大衆に向つて道德的な説教をすることによつて、この社會組織の缺陷を救済せんとするが如きは、社會改造の鐵策として無意味である、何らの効果もない……』

A 『なるほど、社會の仕組が悪い事をしなければ食つて行かれぬことになれば、僕みたいな大食漢鎌足は身を入れる餘地がないね、それこそ乾あがつてしまふ。』

B 『あながち大織冠でなくつたつて、お釋迦さまでない限り、世の中の一般の人間は如何しても悪いことをし勝ちになることは分かりきつた話だ。だから社會を改革しようとするれば、悪いこ

とをしなくつてもメシの食へる社會組織に建て替へるのが、なんといつても近道だ。早い話か現在悪い事をしなければならぬような社會の下敷きになつてゐる大衆の前に立つて、悪い事をしなくてはならぬぞ、とコケおどしを言つて説教したところが始まらんからね。」

A 『まつたくだ、社會全體の徹底的改革といふ點から考へるとすると、そんなお説教は骨折り損の草疲れ儲けさ。』

B 『そこでカール・マルクスは考へざるを得ない。即ち個人主義經濟學に反対しながら、社會を組織せる個人の道徳的革命を以て直接の目的とする人道主義經濟學に赴かずして、社會組織そのものの改造を當面の目的とする社會主義經濟學を主張したのである。』

A 『……さうすると、君はマルクスを極力信奉するわけなんだね?』

B 『マルクスといふ人が嘗て五十年前に此の世界に在つたといふことを信するね。さうして、今君に話したやうな事を考へて火の出るやうに其れを實行化さうとした、といふ事實を信するね。』

A 『さう云つた如是閉式な態度はいけないよ。マルクスの歴史觀を客觀的に批評したまへ。』

B 『客觀的批評——それは六ヶしいことだ。クローチエといふ人は唯物史觀を批評して面白いことを云つて居るよ。從來よりもより以上の尊敬が、唯物史觀に對して拂はれるであらう。然しそれは、この史觀が最終にして、一定不變な歴史哲學であるがためでなく、むしろ適切にいへば歴史哲學でないためであるといふのだ。それからまた「唯物史觀は、一定の社會現象を説明することの必要から起つたので、史的生活の要件に關する抽象的考察から生れたのではない。これは、政治家並に革命家の内奥に於て創造されたので、圖書館に引籠り思索にのみ耽る冷靜な學者の胸裡に於て描出されたものではない」といひ、「歴史家は史的唯物論が、一般的に、多くの場合に就て、概括的に、指示する要件の對等關係並に従屬關係を、各特殊の場合に當倣めて、これを的確にし、又鮮明にせなければならぬので、實に此處に、彼の使命があり、又屢々、打勝ち得ない彼の困難が横はつてゐるのである。然し進むべき道は、方に示された。未だ解説されてゐない歴史上の大問題は、その解決を、此の道に沿ふて求めなければならぬ」とも云つてゐる。とに角、マルクスは例の「經濟學批判」の中で、歴史と社會とを對照してゐるやうに思はれる。しかし、彼は歴史なる語を用ゐてはゐない。社會といふ一つの言葉で、二つの概念を表さうとして居

る。マルクスによると、社會の變革が歴史に外ならない、だから人類を横に見たものが社會であつて、之を縦に見たものが歴史となるのである。社會には之を建築に喩へて見れば土臺と上層とがある。土臺は即ち經濟的構造であつて、彼は之を物質的若くは人類の社會的存在といつてゐる。上層は觀念的形態若くは人類の意識といつて居るか、細別すると法制、政治、宗教、藝術、哲學などがそれである。これまでの歴史家は社會の變革即ち歴史をば、土臺たる經濟關係を顧慮するところなく、單に上層の上からのみ説明しようとしたのであるが、かかる方法では到底眞の歴史を理解することは思ひもよらない。上層の變革するのは、經濟的基礎の變動によるのである。それ故に歴史は之を經濟關係の上から説明しなければならぬ。といふのがカール、マルクスの歴史哲學の大要であらう。「唯物史觀總評」を近いうちに公にしようと思つてゐるから、今は何も云はないことにする。』

A 「かなり種々なる方面から反覆をいとはず精到に論究していただひて感謝する。マルクス派の歴史觀をうかがうに足る書籍はないだらうか？」

B 「精倒どころか、バラック式で恥じ入る次第さ、それはいくらもあるよ、一八八四年にでた

エンゲルスの「家族、私有財産及び國家の起源」 F. Engels. Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des States, などは代表的なものである。邦譯は有斐閣から出て居るし、そのほかカウツキイの「トーマス・ムーアとそのユートピア」 K. Kautsky, Thomas moore u. seine utopie, などがある。』

(三) 實證論の歴史哲學

B 「自然科学の勃興に伴つて、當時の歴史觀も、その影響を受けることになるが、この傾向を代表する重要な思想は言ふまでもなく佛蘭西のオーギュスト・コムト Auguste Comte の實證主義^{ビズム}なんだ。コムトの主張は彼の「實證哲學通論」に窺はれるのだが、それは當時の思索に對して一段と深刻味を有して來た實證哲學^{ポシチブ・フィロソフィ}の土臺の上にたつてゐる、それは唯物論に近い、しかもその原理にあつては唯物論ではない。文化の諸相に科學的説明をあたへ、之を統一的にまとめたものである。文化現象相互の關係や現象の間に窺はれる法則を立證する場合には、すべての材料を経験的諸要素の結合から求めてゐるのだ。科學はそれらの諸要素の前後や共存の關係を明瞭

に分析する任務を持つてゐる。科學は主として全體の關係に注目し、個性的なるものを一般的なものに還元し、特殊なるものを、その環境から説明しやうとつとめる。彼の見解は次のやうである。

神とか超自然的存在については、われらは何等の實證さるる事物を知らないのだ。哲學の抽象的思惟は、實在認識になんの齎らすところとてはない。われらはたゞ實在する現象にのみ注目し、着實にして嚴密なる科學的方法にもとづいて、それら事物の本質と法則とを、理解するだけにとどめねばならない。ここに云ふ純科學的な實證的考察法は、人間精神の發展を示す三つの段階の中で最高の地位を有すべきである。

最初の段階は神學的考察で、人がその環境の事物を超自然的な力によつて説明した時代である。この段階はさらに聖物崇拜と多神論と一神論の三級に分れる。さうして一神論はやがて第三の段階たる形而上學的考察に達するところの過渡的段階を形づくる。それから、第二の形而上學的考察は、すべての現象界を抽象的觀念と原理と力に還元し、最後に、自然てふ終極の原動力に統一する神學と同じやうに、形而上學もまた事物の絕對的説明を目論むのであるが、異なるところは前

者が單なる空想を用ひた範圍を、後者は論理的に證明してゐる點がさうなのである。第三の段階たる實證的科學的考察においては、事實と一致するといふことが唯一なる判斷の規範で、ガリレイ、デカルトよりこのかた築かれはじめた自然法則の不變性が唯一の信條である。そして唯事物の相互關係、前後關係、一様性などを規定すべき使命をもつてゐる。

考察法の進化は、單に認識の問題だけにとどまらずに、同時に社會上のあらゆる事情に關聯して、その姿にいはば實證的といふ刻印を與へて居るのだ。各々の時代はその時代の中心思想に從つて、共通した特性を持つてゐる。そして、かかる傾向は各個人におけるさまざまの個性の相異にも拘らず、あらゆる範圍にわたつて窺はれるのだから、歴史上の文化發展は生物學的要素や經濟的要素によるものでなく、心理學的要素にもとづいて限定されるべきである。そして發展の法則はさまざまの時代を比較考察することによつて、コムトのいはゆる「比較的歴史的」方法によつて發見されるべきものである。從つて彼の歴史的認識は實用歴史が用ゐる個人心理學的方法による認識を斥け、個別的なものを、一般的要素に還元して考へるところの社會心理學的方法による認識を採用するのである。コムトにいはせると、かかる考察のみが文化一般の因果關係と發展

の法則とを規定し得る方法であつて、これのみが眞の科學的價値を有しうべきであるからなのだ。個別的の動機と事件、個人の行爲や觀念、いくら偉大な天才であつても、それらのものの環境の綜合的影響によつて規定されるのだ。

A「環境が人を支配するといふことで思ひついたが、ずつと前に「社會主義社會學」といふ本を讀んだら、スペンサーがカアライルの英雄論に引導を渡してゐるところがあつたぜ。……「シエイクスピアにしても、文明生活の夥多の傳説——過去から繼承し、彼の思想を豊富にしたいろいろな經驗、さらに幾百代の人々が使用の結果として發達せしめた饒多なる言語なくして、はたしてどのようなドラマを創作し得たであらうか？ 鐵を知らない種族か、ファイコの火で熔かせるだけの鐵をしか獲得し得るに過ぎぬ種族の間に、あれだけの發明力を持ったワットが生れたとせよその時、蒸汽機關發明に對して、果して、いかなる機會か存したのであらうか？

英雄崇拜者のひたすら感佩してやまない帝王や將軍といふやうな種類の偉人についても同様な答が得られるといふのだ。古代希臘の勇將たりしクセノフォンといへども一萬の彼の部下にして柔弱怯懦、しかも彼に對して忠順でなかつたとすれば、彼の眼醒しき功業は不成功に終つたであら

う。シーザアといへども、訓練せられたる精兵、前代ローマより繼承したる軍隊の威名、戰術、組織なくしては、彼の大征服は決して實現されはしなかつたらう！ といつた調子で、随分と痛快なものだつたことをつきりと記憶してゐるよ。」

B「そんな具合で、今でこそ僕らに慣用されてゐる事柄であつても、もとはといへば實に社會學者オーギュスト・コムトの創見であるといへるんだね。」

A「なるほど偉らしいものだね。しかしこの論法をこねくると、コムトを待たずとも、この卓説は早晚何人かの口の端に上りさうぢやないかな。」

B「いや、巧ましく與太るね、もちろんコムトの所説のみが絶對的でないことは分かるよ、たつた今、君の記憶に上つたスペンサー先生が慥か斯ういつてるからね。世に絶對なるものがないといふことは絶體の眞理である」つてね。」

A「さしづめアインシュタインの相對性原理といふところで、落かね。」

B「さて、コムトはいふのだ。われらの（コムトの）時代は、形而上學的段階から實證主義の時代へと流れてゆく過渡期にあるのだ。多くの科學的分科は、すでに實證的階梯へ到達してはる

るが、しかしながら、社會上いちはん大切で最も複雑したる知識であるとされる社會學に至つては未だしからず、しかして歴史は實にこの社會學に屬するものである。このあらゆる學問を前提するところの人類社會の學は一般法則の認識によつて、實證的科學となりべきもので、現今の時代はこの任務を完了せねばならぬ。といふのだ。こんな風にして、實證哲學は自然科學と社會學との關係を密接ならしめたが、歴史哲學上にも亦貢獻するところが多かつた。近世の社會學は啓蒙家思想とも思辨哲學とも異なる新しい學說を、社會上の考察に於て示した。啓蒙思想は個別體をアトムの如きものと見做し、個別體相互の關係から、一般的結合を導きだして居るに對して社會學は個別體を初めから相互關係の結合に本づけ、この關係そのものによつて個別體を構成しやうとしてゐる。そしてまた社會學は、思辨的觀念論の求めたやうな、精神生活における一切の内面的關係を拒絶して、個別的要素の時間及び空間中における事實上の關係から、一切の結合を見出さうとしてゐるのだ。だから有機體といふものの考へ方が、觀念論の時代とは全く變化して居て、主要問題は、全體そのものの内面的生命に關せず個別體の相互關係にむかつてゐる。かくのごとき考察法は、人間生活に對して、新しい觀察點を見出したのである。生活は總て自然的制

約の影響の下におかれ、行爲の自由に任ねられた範圍が減少され、個別體は唯だ社會的結合體の一部分としてのみ考へられるやうになつた。そして群衆の動作が注目されて來た結果、歴史的考察の場合にも、社會心理學的、及び民族心理學的な説明が中心になつた。歴史上の構成は常に自然的制約にもとづく「種族」の概念によつて行はれるやうになつた。

コムトの思想はきはめて深甚な影響を學界に及ぼすやうになつた。今も尙さうではあるが、この學說は主としてジョン・ステュワート・ミル John Stuart Mill、ハーバート・スペンサー Herbert Spencer、ヘンリー・トーマス・バツクル Henry Thomas Buckle、エミール・リットン Emil Littré、アンリ・テイヌ Henri Taine、カール・ランプレヒト Karl Lamprecht、等の諸學者の著書によつて媒介され、一般に感化を及ぼした。社會學や民族心理學や文化史の如き全體の知識領域は、かれの刺戟鼓舞によつて成立し充實され、今云つた學者達は、彼の觀念を自己樂籠中のものとなして一層これを布衍したのである。特に英國の歴史家バツクルは其著「英國文明史」において一般の注意を惹いた。彼は歴史的発展の法則を群衆を觀察することによつて見出さうとはしたが、しかしコムトのやうに社會心理學によらず群衆行爲に表はれる靜學的法則に注目した。統計學的觀察に

より、集團行爲の統計に於て外見上傑出する合法性を根據とする彼の考へによると、歴史はかかる法則の認識によつてのみ、科學として資格を得るのだ。個別的事實や個別的な人格の認識は、なら科學的價値を有するものではない。

その後の新しいフランスの社會學者や歸史哲學者になると、この集團事象の統計及び知識は一層偏重されて、歴史の總體と見做されるに至つて居る。極端なる歴史の靜學論がそれである。アンリ・ブードー Henri Bourdieu は「歴史及び歴史家」といふ本のなかで、なんらの言語を用ゐず、たゞ統計の數と公式とによつて集團事象（群衆の運動）をば表現するのが歴史學の究極の理想であるとし、普通に行はれてゐる事實の細かい記述は、それはたゞ好事家的文學の體象にすぎないのだと言つてゐる。

ドイツの歴史家たちは、これ程極端な考へこそ持たなかつたものの、しかし實證論をコムトの源泉に溯つて究め、それが正しくあつて有利なる限り、之を意識して自己に作川せしめることを久しく怠つてゐた。だから茲に珍しいことが起つた。それドイツに於ける専門史家の一人であるカール・ランブレヒトが、コントの最も本質的な根本思想——發展は社會心理學的に限定さるべ

きこと、比較研究法によつて諸文化時代を演繹すること、個人が全體狀態に繫屬すること、歴史がそれでこそ現實に科學の位置に進められるといふ嚴密な因果認識の要求されること、單個の事件を科學的でない藝術的描寫の領域の追ひやること——をその「獨逸史」において力強く表述した。その他でも多くの論文でこれを明言しながらだね、しかも彼自身はコムトと一致せることを知らず、世の中でもこの一致に氣付かなかつたといふ香氣さなんだ。ランブレヒトは、その觀照が集團現象や狀態を過重視したので、自家撞着に陥つたばかりでなく、かの形而上學的に創められカントとその學徒によつて完成された觀念説を、彼が原理として排斥してやまなかつたので、ひろくランケの歴史觀を奉ずる一派の歴史家たちから手痛い反對に會つた。

A 『なんだい、そのランケの歴史觀といふと？』

B 『それはすぐこの次のカント派の歴史哲學のところでお話する。今はたゞ名前だけでないよら記憶しておいてくれ給へ。さて、ランブレヒトは實證論の精神においてカント派哲學の形而上學を批判した。ところで彼もまた實はこの同一の哲學から、歴史發展の本質的内容が人間精神の進歩しゆく自由意識であるといふ思想を取つてきて、社會心理學的全體關係において、もろく

の文化時代を限定すべく此の思想を獨特を適用しやうとしたのだ。』

(四) カント派の歴史哲學

B 『これはカントの思想から出發して、フイヒテ Fichte, シェリング Schelling, ヘーゲル Hegel を經て系統的に完成され、獨逸史學界を開拓したといはれるレオポルド・フォン・ランケ Leopold von Ranke, らの先覺が現れて活動した頃、歴史に對して非常なる力を及ぼした觀照である。だから、このランケの模範的な、永く後世にあとを残すであらう活動を通して、今いつたやうな哲學の本質的な部分、特にその觀念説や、その國家及び個人の評價が彼の門人達の史觀の中に這入り、さらに又これ等の人々の門人たちの歴史觀の中へ、それからそれへと傳へられて行つた。さうしてこれ等の思想は今も尙ほランケの學派に屬する歴史家のグループで弘く行はれてゐる。だが、彼等の多くは、彼等の思想を孕んだ觀念哲學の體系とは拘はりなく、單に實用的觀照として所謂觀念を押し立ててゐる。さういつた違ひがある。のみならずこの體系は、ヘーゲルによつて最も倫理的に爲し果されたやうに、統一的發展原理や個々の民族の全體發展における關與

や、歴史經過における自由と必然との關係や、個人の國家に對する關係についての疑問を有力に設定し、そしてこれらに獨特の解答を與へて深刻な影響を及ぼしたのであつた。

獨逸の理想主義哲學の創建者であるカント Kant は、また歴史哲學にも多くの功績が數へられるのだ。カントの歴史哲學上における任務を大別すると三つになるね。第一は論理學的方面を主にするもので、現代新カント派の人たちによつて次第に認められて來たカントの功績である。今のところでは主として「純粹理性批判」に取扱はれてゐる。經驗的實在の先驗的形式を歴史の認識の問題に結びつけて考へようとする試みで、カント自らは、自然的宇宙についてだけ考察してゐたものを、新カント派の人たちが改革して歴史的宇宙把握にも適用しようとして居るものなんだ。この範圍でのカントの功績は、後からの學者の努力を待つてはじめて意味あるものとなつてくるので、この意味からカントの哲學は、その他の方面においても歴史の論理學的考察に多くの暗示を持つてゐることが想像されるのだ。

第二は、歴史的宇宙の原理に關するカントの研究であるが彼が「實踐理性批判」に於て自然的制約から獨立した人格の意義を認めたことは、自然的宇宙に對して、文化的宇宙の存在を根本的

に築きあげたことを、充分に證明するものである。ここに於てだ、歴史的世界の獨立した意味が立認せられる。まことに歴史に正當なる意味を與へた最初の哲學者こそは、カントその人である、と學者はいつて居るのだ。

第三、カント自らが歴史哲學上の問題として論じた試みである。これらの著述のうちで重なるものは「世界公民を目的として見たる一般歴史觀」「人類史の憶測的起源」「永遠の平和」「ヘルデル歴史觀の批評」などがあるが、全體としての根本思想は、いふまでもなく合理的目的觀なんだ。

A 『ざつと、どんな筋合だらう。』

B 『人類の進歩といふことが根本の基礎である。その終局目的を目標として初めて歴史を哲學的に取扱ふことができる。歴史の想像的原始狀態としては、純動物的な性質を假想する。はじめ本能に従つてゐた人類は、次第に理性の働きを得て、終に自然の物象をもつて、自己の目的を達すべき手段と見做すやうになる。自己の自由を自覺してから人は自然の膝元をはなれて世界に出る。人類とその文化の歴史とは即ち自由の歴史に外ならぬ。』

ここに欲望による葛藤が生ずる。文化の進歩は本能的幸福の減少とともに増す、しかし、葛藤は尙公民社會の立法的秩序を必要として来る。人類種族の使命は、個人の幸福を得ることではなく人類に課せられた終局の目的を完了するにある。かういふのだ。』

A 『なるほど……。』

B 『さて、』

A 『ところで、僕はちよつと、ぢやない大いに曰くがあるんだがね。さつき、君は斯う云つたらう。カントの門人等によつて展開して行つた一派の歴史哲學は、ヘーゲルによつて最も論理的に爲し果されたやうに、統一的發展の原理や、各民族の全發展における關與や、歴史經過上における自由と必然との關係や、個人の國家に對する關係についての大疑問を前提して、これらに獨自の解答を與へて非常なる影響を學界に及ぼしたと云つたらう。さう云つたままでは尻切れトンボぢやないか？』

B 『これは恐縮した。どうも君と對坐してゐるとスバイと話合つてるやうなもので、油斷もすきもあつたものぢやない。ところで、君の詰問された一切の事項は、カントの起した疑問のうち

に含まれて居るのだ。どう云つたかといふとだね、個々人の意志衝動と行爲とが極めて自由なることは外見上明白である。しかも全體において世界史の一の規則的な進行が存在する。かくの如き矛盾は如何にして爾かあり得るであらう？」

さうして、カントが之に與へた解答もまたカントの後進にとつて權威ある言葉なのである。それが可能であるのは、人々が何らの拘束のない放縱な利益争ひにおいて自ら破滅することなからんが爲め、自由意志を以て自ら國家の秩序とその法則とに服従するの強制を自己自らに課すること、同時に之によつて個人の最大可能の自由が全體の必然的規律性と並立共存し得ることに因るといふのだ。

これらの思想は、詩人シルレルの哲理的な作品から吾人によく傳唱されて知らるのであるが獨逸理想主義の歴史哲學が到達した、最も光彩ある歸結をなしたといはれるヘーゲルが、之を探つて自分の世界發展の體系の高處に引上げたのである。この哲學者は世界史を見て、その内において自由の無い鈍い自然状態から、今いつたカントの見解に従へば、たゞ國家においてのみ可能な精神的自由の目覺へ、「神性若くは觀念」が自己發展するものであると考へてゐる。そして此の

發展は三つの主要な時期を通過してゆく。つまり諸民族や個人の精神が意識されない自然性の繩張のうちに拘束されて、なんら自由の意識のない時期である。次に精神が、その自由の意識へ進發しはじめの時期である。最後に、この部分的自由の意識が普遍的精神上自由の自己感情に高まり、一切の關係 侵徹する時期である。この發展において本質的及階段を形成するものだけが歴史である。だから、阿弗利加や亞米利加の如き大地帯は、ヘーゲルに従へば、ことごとく歴史上の運動から除外されるのであつて、何等の歴史を有つてゐない。もろくの歴史ある國民においては、彼等の民族生活の領域が種々異なれば異なるだけそれらの特殊の方法で、全體觀念がそこに實現され、かくて夫々の「民族精神に統一的刻印の姿を與へる。この全體觀念の實現に相應する諸々の觀念」は普遍的なものであつて、この普遍的なものが如上の有らゆる特殊の現象になつて現れて來てゐる。個々の人間、そのうちでも第一に先覺者や天才なるものは、個人の直接の智と意とを超越し、如上の觀念が必然性を以て實現されるところの手段である。しかもその際は自由意志をもつて國家における法律的秩序に服従しながら、己れの本性の核心たる道徳上や宗教上の自由を保持し得る。なんとすれば、法律は自己を限定するの自由に外ならぬが故に、法律に

服従するところの意志は即ち汝自らに服従するに過ぎないからである。シルレルが「おん身たちの心の裡へ神明を取り入れよ、しかせば神明は、その世界の玉座より降臨し給ふ」と謳つてゐるのは、カント派の思想を明らかに示してゐるといつてよいだらう。』

A 『なか／＼實のあるお話だけに、むづかしい……。』

B 『君が嘆聲を發するやうでは僕の表現が拙づかつた證據だ、すこし異つた調子で概括して見よう。』

A 『さうしてくれ給へ。僕もよく頭で整理するからね。』

B 『ヘーゲルは、歴史は宇宙の理想に従つて辯證的發展をなすといふのだ。哲學は完全に歴史をその體系の中に織り込み、必然なる發展をして實在の真相をつくす理性の展開たらしめるのだ。ここに云ふ理性の展開は、單なる人間の意向を遙かに超越し、それ自ら獨立して自らの必然性に従つて動いて行く。かかる展開の原動力となるものは「矛盾」そのものである。矛盾は常に綜合を見出しつつ進んで行く。「破壊」は常に新なる「建設」の手段となり、あらゆる「否定」は生命の發展を助けて行く。かくの如く實在を合理化することは、同時に、實在を組織化すること

である。實在の並存する諸相は、宇宙の根本理性の示す表現となり、連続する諸相は、統一的發展の中に含まれる一つのモメントと見做される。

宇宙を支配する理性は、同時に歴史をも支配し、歴史は理性的發展を行ふ、歴史は單なる義務として、理想を目標に進むほど無力なものではない。歴史的發展そのものが眞の實在である。理念は、眞實なるもの、永遠なるもの、力強きものであつて、自らを宇宙の中に啓示して居る。宇宙の大精神は、諸民族や諸國家の運命と事實との内に自己を表現し、その權能を世界史の内に實施してゐる。各個の民族精神や大人物やは、すべて此の世界精神の使用する手段にすぎない。世界精神の意志を充すために各個の精神は存在する。しかしながら各個の精神は自己に課せられた役目に對して全く盲目である。個人をして事業の要求を起さしむるものは、世界精神が自己の意志を充すために用ふる詐術に外ならない、といふのだ。それから、歴史を説明することは、宇宙の絶對的な最終目的を成就するために、神が使用した人間の欲求と才能とを示すことである。世界史を編むところの經は理念であり、緯は欲求である。そして、兩者を統一するものは、國家を秩序立てる道德的自由である。各時代を通じて常に、選ばれたる一民族が指導者となり、任務を

完了したる後は、さらに他の民族が之に代はる。だから、歴史は、東洋、ギリシヤ、ローマ、ゲルマニアの世界に大別される。かかる経過は、同時に眞に自由への階段であり、世界史は自由の概念の發展として考へられる。——大體こんな譯けだ。』

A 『やつぱり六ヶしいね。』

B 『今からみれば、ヘーゲルの歴史観は純粹に形而上的體系の一部であつて、經驗的歴史學の立場からは、肯定することはできないんだが、ともかく當時の思想を動かした功績は偉大なものさ。けどし、内容の豊かな思索と該博なる學識によつて、辯證論の骨格を具體的な事實で肉づけた彼の歴史哲學が、その頃の合理的若しくは教訓的な歴史觀に對して異彩を放つたことは事實だらうと思ふ。』

それから僕は今まで一寸いひ忘れて居つたのだが、それはフイヒテ Fichte の歴史哲學だ。』

A 『フイヒテつてどんな人かね？』

B 『カントの思想から出發して、その實踐的方面を、特に發展せしめたのがフイヒテなんだ。』
彼には高潔なる彼の人格の反映ともいふべき歴史哲學的著述がある。主要なものを擧げると「人

の本分」「現代の特質」「獨逸國民に告ぐ」「國家論」などだ。』

フイヒテの思想は、極めて嚴肅な理想主義であつて、道德律の無條件命令に従ふ行爲によつてのみ、人は地上において授けられた使命を完了することができ、人類の共同事業に參與する光榮を享け得るといふのだ。だから、彼の歴史哲學は、それ自ら道德哲學であり、さうして彼の宗教哲學である。歴史哲學上におけるフイヒテの手柄は、まあ、人類のいとなむ歴史的生活のプリンスブルを闡明した點にあるんだね。』

A 『たいした代物ぢやなさそうぢやないかね。ヤソ坊主に史學者といふ衣を被せて、敬虔な教會堂の雰圍氣に浸らしておいたまでのことだね。』

B 『そんな風に君は想像するんだね。粗硬なる酷評も甚しいと云ふものだらうよ。ぢや、君に對しては折角のフイヒテの歴史哲學の有難い意見も、みんなフイになつてしまつた、だからこの位で止しておかうよ。』

さて、カント派の歴史哲學の抽象的な前提とその觀念とから、別に新なる傾向が生れて來て、僕等を導いて具象的な現實なる大地のさ中へと這入り込ませるのである。しかも此の傾向は、唯

物論や實證論のシステムのやうに、超越的なものと脈絡した關係の絆を断ちはしない。ベルンハイム教授 I Bernheim に従へば、それは人生論哲學と名づけられるのが適合してゐると云ふから、さしづめ僕らもそれに従つておこう。』

(五) 人性論哲學

B 『これはヘルデル Herder から始まつてゐる。この人はカントと同じ時代に於て、一七八四年から一七八七年までに「人類史の哲理考察」なる力作において、自分の歴史觀を説いてゐる。いはゞ人本的史觀ともいふべきものを代表する。ヘルデルによると、人間性とは一個の理想概念である。歴史はかかる理想を實現するための缺くことのできない手段で、それぞれの時代の混雑の中から次第と氣高い人間性の帝國が建設される。

自然進化の原理から形づくられるところの、様々な地上の森羅萬象のオルガニゼーションが榮えてゆくうちにあつて、人間のみが自己の多方面な性能を以て、その最高の地位を占めてゐる。この人間の運命は自分を取り捲く大自然との絶えまなき交互作用のうちに、地上における一切を達成すべきやうに定められ、この目的のために外部の可能性と内的の力や性能といふがごときも

のが人間に與へられて居る。一個人も一民族も一人種も、それ自身でのみ孤立して居つたのではとても人間發展の一切の可能性を造り上げることは出来ないし、況んや人間性の完成をや。自然は人間を多様に體制し、それがため地上において諸々の人間種族の體制を可能にした。下は黒人の低い理想から、上は最も精緻なる人間構成にいたるまで、自然はその人生といふ大問題を總ての時代の有らゆる民族を以て解決せしめる。なぜなら各民族はその性能と外部の狀況とに従ひ、各自が固有の構成目標と發展目標とを有するからである。しかも、もろもろの文化の一切の相違があるにも拘らず、それらの一切を通じて一個の共通類型が儼存する。それは人間形態の一切の形式において共通類型があるごとくである。つまり、人間性若しくは「人生」といふ共通の根本特相と名づけ得べきものが儼存してゐる。これらの姿を、すべての點に於ていよく豊かにますます純粹に造りだし、象り出すこと、これが多くの例外があるにもかかはらず、いつでも歴史發展の不斷の目標である。

キルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt の見解もまた殆んどこの觀照の圈内にあるといつてよいだらう。この人は觀念哲學の出發點から次第に遠ざかつて、歴史のうちに人

性理念の現實化を看破し、この人性理念の現實化は、具象的諸現象の多様さの裡に深く沈潜して研究することによつて達成せらるべきである、と説いてゐるのだ。』

A 『フンボルトは歴史をもつて人間性的理想の實現と見做して居るのだね。』

B 『それから、ヘルマン・ロツツェ Hermann Lotze は自家の抱いてゐる世界觀の體系と密接に關聯して、一層廣汎に一層深遠にヘルデルの見解を採り、その「小宇宙、即ち自然史及び人類史への考察」において之を評述した。(一八五六——一八六五年)この人もまた一切の方面において民族生活の多様な諸現象に深入りして検討し、そのうちに人間存在の共通理想に到達するために全體において努力の高まりゆくことが認識せられると考へた。この努力の全的は人間性を創り出すことである。この人間性についてヘルデルは人生の諸根本相として、ただ理性、性の善・自己及び他人に對する善意といふがごとき、可なり漠然たる諸概念だけを擧げて満足してゐたが、彼れロツツェにいたつては進んで、その幾多の特相を一切の生活領域における複雑した現象に繋げて之を詳密に定めてゐる。彼れはさらに人間の性能が周圍の自然とだけではなしに、各時代が存在する文化關係とも不斷の交互作用を結んで發展することを指示し、人間の内部に内在す

る精神衝動をも自然と社會との外部の事情と同じく、歴史生活にとつて確かに與へられた獨立的事實として尊重する。ロツツェはかくて、かの理想主義的傾向と唯物論的傾向とが各自に一方に偏してゐるのに反對して、兩者の何れからも等距離に離れて、兩者を超越してゐるといはれる。これは正さしく彼の世界觀なるものに相應した考へ方ではあるまいか。』

A 『彼の世界觀と云ふと？』

B 「自然法の機械的装置は、獨立的に與へられた人間本性のもろくの内的作用衝動が、その不斷に向上して、ますます多面化する物理的、化學的、生物學的種類の諸反動をもつて、自らを外界に向つて現實化さすのに必要な必然的形式であるといふのだ。つまり、世界に遍在充滿する交互作用の一個の大きな體系なんだ。有力なる現代の歴史家は、この考へ方は一個の普遍的にして何等の組織的定説的特殊關心によつて局限せられない歴史學の研究を最もよく建設し得る基礎觀念であるとなし、かかる觀照は歴史學のもろくの具體的職能から出てくる學そのものの概念や本質に無條件にびつたりと適合するからだ、と口をきはめて稱揚して居る。

(六) 新理想主義の歴史哲學

B 『實際論や進化論や經濟的唯物論などを基礎とする歴史哲學は、お互にちがった學說であるにもかかはらず、人間そのものを全く環境の所産であると限定してしまつて、歴史的發展をその内面的關係において見ず、いつでも外部的事情によつてのみ説明しようとするところに、いはゞ一派の共通點なるものがあるやうだ。それらの歴史哲學は、獨立した自己の原則によるものではなく、一般の自然的制約を基礎として居るものであるが、かかる傾用は、これらの思想を生んだ時代の著しい特徴でもあるといへるね。』

歴史の考察に新鮮なる眼界が展開され従來の誤謬から救ひださるるためには「正當なる哲學の復興」がなければならぬ。この使命を完うしようがために生誕したのがカントの思想からくる新新理想主義の批判哲學である。』

A 『その新理想主義の歴史哲學とかいふのと近ごろよく聞く新カント派の歴史哲學とかいふのとは、どう違ふのかナ？』

B 『誤解があるといけないから、ちよつとお話しようね。哲學の方でよく口にする獨逸西南學派といふのはバーデン學派とも云ひ北獨逸におけるマルブルヒ學派とともに、日本などでは新カ

ント派と稱せられて居るのだが、本來なれば新カント派と云へばだね、ヘーゲル學派の分裂後にカント哲學の復興を信條として起つた一派を指稱するのであつて、今日のバーデン學派やマルブルヒ學派とは違つてゐる。それで、マルブルヒ派の學者のうちでは、自派のことを新批評主義といつてゐるのだ。』

A 『さうすると、日本でなら、まあ、新カント派がつまり新理想主義でよい譯なんだね。』

B 『西南學派とマルブルヒ學派とは、ひとしくカント哲學の精神をその哲學の基調として居るとはいへ、わづかに一致して居る點といへば、先驗的であるとか、批評的であるとかいふ哲學の方法に關する部分だけであつて、その概念に關しても、その問題に關しても、この二つの學派の間では、可なりな相異點を示してゐるといふことができるのだ。マルブルヒ學派が認識論に於て考察する科學はカントと同じでそれは主に自然科學に存するやうであるが、西南學派の學問論では自然科學と共に文化科學、すなはち歴史科學といふものを對立さして高唱するのだ。』

西南學派はウインデルバントが創唱するヤリツケルトがそれを大成してラスクがこれを繼承したといふことが出来るだらう。』

A 『これらから愈々問題の「リツケルトの歴史哲學」との初對面といふ段取になつて來たね。』
B 『そんな譯で、この派の歴史哲學を論究するためには、どうしてもリツケルトに據らなくてはならない。』

ハイน์リツヒョリツケルト H. Rickert の歴史哲學はカントの「純粹理性批判」の主旨に基き之を修正して歴史學的概念構成の可能と基礎とを批判的に考察したもので、歴史哲學と云つても、從來の概念とは全然相異してゐる。精細に云へば「科學としての歴史學が所有する一般基礎の方法論的考察」を目的とするものである。だから、自然科學を成立させてゐる哲學的基礎とは全くちがつた、史學特有の基礎を明らかにして、史學の方法を自然科學の束縛から完全に獨立させることがその目的であるのだ。

リツケルトは「認識の對象」といふ本のなかで、カント認識論の改造を試みたのであつた。彼の歴史哲學に前提されて居る重要な基礎は、このカントの批評のなかで見出されるのだ。即ちカント哲學それ自らでは、自然科學の方法論的基礎しか取扱ふことの出来なかつたものが、リツケルトの改造によつて、新たに歴史學の基礎にも役立つやうになつた。リツケルトが歴史哲學者

として、重要な使命を果すやうになつたそもその基礎は、實にこの點に存するのだから「認識の對象」は是非とも初めに考察する必要があるのだが閑が無いから仕方がない。この本は山内得立氏かの邦譯が出てゐる。いつか讀んで見るとよい。直接、歴史哲學の研究に關する重要な彼の著書は「自然科學的概念構成の限界」と、それから「歴史哲學」「自然科學と文化科學」とであるが、そのうち後の二書は邦譯が出版されてゐる。

彼の歴史哲學を大別すると三つになるのだ。一、歴史を研究する特殊科學が歴史的な生活の特殊なる範圍を取扱ふものであるに對して、それらの特殊なる研究によつての成果を、一つの統一的なる全體として綜合的に考察する場合に、世界史としての綜合哲學が生ずる。二、歴史生活の特殊なる内容を外視して、歴史の有する一般的意味及び一般的法則を問題とするとき、ここに歴史的な生活の「原理」を研究する歴史哲學が成立する。三、歴史は「生じたること」そのものではなく「生じたる事の敘述」である以上、一種の科學である。ここに哲學的問題が生ずるので即ちかかる理論的部門においては、事物そのものが研究の對象となるのでなく、事物の「知識」が研究されるのである。この場合に歴史哲學は歴史的認識の學として、廣い意味における論理學の一部と見

做される。その外世界観なり、人生観なりの一般問題に對する歴史觀の意義についても尙歴史哲學上、第四の部門が成立するが、改めて歴史哲學の一部門となすには足りないであらう。

そこで先づ、世界史と特殊なる史學との關係を考へて見るに、「前者は後者を單に集めたものではなく、すくなくとも歴史を統一的に敘述するものでなければならぬ。」では、此統一を行ふ原理は何であるかと云ふ問題が起らざるを得ない。即ち世界史を構成するには、先づ歴史の原理を考察して置かなければならない。しかるに歴史の原理を研究する學が自己の問題を定むるに要する諸概念は、はじめから前提してかかる譯けには行かない。自然界に法則を與へることは、誰れだつて異議をさし挟まなかつたに對して、歴史に法則を與へる事の當否は甚しい論争の種を蒔いた。自然科学の範圍内では、法則が個々の學によつて求められるに對して、史史學にあつては、この問題が哲學上の研究對象になつて居る。これは如何なる理由によるか。そして、いつたい吾人が史史的展開の過程に特殊の意味を認め、之を認識せんがためには、如何なる手段が必要となるんだか。歴史哲學は原理の學として、まづ是等の疑問に答へなければならぬ。だが、かかる疑問に答へるには、歴史的認識の本質一般が明瞭にならなければならぬ。學としての歴史に關す

る論理學的知識を得ることが何よりも先に必要になつてくる。

今いつたやうな具合で、各個の獨立した問題を有する三つの部門は、お互に連絡し合つて、そのうち論理學が歴史哲學の最初の出發點と考察の基礎とを形づくつて居る。』

A 『面白くもあるが六ヶしくもあるし、又おかしなところもあるね。』

B 『大分穿つたやうな猾い批評をする男だ。困まつたものだ。謹聽してくれなくちやいけな。學問には自然科学の外に、歴史的科學若くは文化科學と稱するものがなければならぬ。自然科学の對象とする自然は、同一なるものが繰り返されて居るのである。一般的な法則に従つて、同一なるものが繰り返されて居るのである。かかるものが、學問の對象となることは否定し得ない。従つて自然科学の成立は容易に之を基礎づけ得る。ところで同じく學問の對象のうちでも、幾度となく繰り返されるものの外に、たつた一回のみ起るものがある。普遍的なもの、一般的なものでなくて、特殊なものである。法則によるのではなくて、個性を持ったものである。それが歴史だ。』

それなら如何して歴史は自然とひとしく學問の對象となることができるのか？ かう云つた問

ひを發して、リツケルトが答へる。それは學問の性質を吟味すればよく解る。學問とは構成せられた概念だ。此概念構成は、これまででは一般的のものに限るとばかり考へるから、學問としいへば自然科学のみが存在することになつたんだ。けれども概念構成は、そんなに狭苦しく解釋する必要がどこにあるだらう。なんらかの方法で、對象を改造し、それを主観に取り入れるのが概念構成であるやうに、特殊なものをも個性化の方法によつて主観に取入れるものだつて、やつぱり概念構成だらうぢやないか。前の自然科学、後の歴史學若くは歴史科學なのだ。——リツケルトはざつとこんな具合に説いてゐる。

以上のやうに、學問の對象を形式の上から自然と歴史とに區別した彼れは、さらに内容の上から一般的なものをも前同様に自然となし、特殊なものをも歴史の代りに文化だといふ。つまり自然といふ語は、形式、内容の二方面から一般的なものを表はす事ができるが、特殊なものに對しては、歴史といふ語は單に形式的な方面の表白に過ぎない。だから内容の方面はどうしても文化といふ語で表示する必要があるといふのだ。この場合、自然は價值を含んでをらぬが、文化には價值が盛られてゐる、だから之を概念に構成するにも、自然に對しては價值を離れた方法を用ゐる

るのだが、文化に對しては、價值關係の方法を執らなくてはならぬ。自然科学は價值を離れた方法によつて、一回起的な事實を決定するのをもつて其の任務とするのだ。

以上が、リツケルトの歴史學の性質に關する意見の概要である。この意見が發表されると盛に攻撃するもの、頻りに非難するものがあつた。僕自身にしても、可成りの言ひ分がある譯けなんだ。が、ともあれ彼れが自然科学の如き法則に關する論議だけでは、とても歴史學の性質を説くことができない所以を高唱して、事實學としての歴史學を提唱して、自然科学に對立さすべく始めて獨歩の地位を賦與せる點だけでもリツケルトの名は記憶さるべきであらう。

歴史學の方法論が内容的に構成された歴史哲學と分れて、特殊な哲學的部門となつて來たのは二十世紀初頭に於ける一般的な傾向であつて、必ずしもリツケルトに限つたことぢやない。ウィルヘルム・ディルタイ W. Dilthey は夙に一八八三年に「精神科學序論」といふ著書の中で、歴史學の認識論を研究して重要な暗示を後世に残してゐるよ。ディルタイは異色ある學者として、歴史研究に關して非常に深い實際上の知識の所有者であり、しかも認識論的研究において優れた研究をし遂げてゐる。

彼れによると、自然科学が常に官能的知覺と悟性によつてのみ研究されて居るのに對して、精神科學たる歴史學の認識に於ては、人間はいつでも一つの統一的全體として取扱はれてゐる。ここに二つの科學の持つた特殊性の差別が認められるのであつて、個性體いふものこそ、歴史研究の主要な對象である。歴史學は人間ばかりでなく、物質的材料もまた取扱ふのであるが、歴史的世界を支配するものは、いつでも個性體であつて、之れよつて初めて客觀的な文化事實が産み出される。歴史上の事實が、觀る人の想像内で追想され得るに對して、自然界の事實は、觀る人によつて内面的に理解し得るものではなくて、たゞ外面的に、悟性を用ひて理解され得るにすぎない。言ひ換れば、自然界の事實は、たゞ現象の形式において與へられるに過ぎないが、精神的事實は、直接、觀る人の心と相通する。即ち材料たる個人の精神生活を理解し得るところの機能は、精神的想像の働きである。ここに云ふ想像の働きは、概念的理理解とは異つた、精神的あらゆる側面を要求する働きである。觀る人自らの體驗が豊富であればあるほど、他人の精神的存在を追想し、理解し得る能力も増大してゆく。歴史家の主要なる任務は、たゞホンの手掛りの材料となる事實だけを悟性的に規定することではなく、それ等の材料に基いて、総合的な追想的

解釋を施す點にあるのだ。この意味から、歴史家の仕事は藝術家の仕事に似通つて居る。といふのだ。

パーデン學派は、ウイルヘルム・ウインデルバンドから、リツケルトを経てエミール・ラスクルに及んで居る事は先にも一寸いつて置いたね。この學派の人々は、みんな歴史學上の諸問題に、相當な功績を負ふべき處の人達であるのだ。ウインデルバンド Mindelband は一八九四年に「歴史と自然科学」において、自然科学の概念構成が一般化的抽象にもとづくに對して、歴史學は純粹に個性化的な事實を取扱ふといふ所説を敷衍して、はるかにリツケルトによつて發展すべき思想を暗示してゐると見ることが出来る。ラスクルはリツケルトの後進でありその著たる「フイヒテの理想主義と歴史學」において、カントやフイヒテやヘーゲルの哲學を基礎とする歴史認識論の批判を試みてゐるのだ。

ひとしく新批判主義の立場によりながら、パーデン派とは背反した歴史認識論を説いてゐる學者にゲオルグ・ジムメルがある。この人の研究は「歴史哲學の問題」に窺はれるのだが、それは主に歴史家が歴史的統一體を構成する場合と、その材料の用ひ方に關するものである。自然科学者

が感覺的材料を用ゐ、悟性概念にもとづいて自然てふ思惟的構成物を形成するやうに、歴史てふ精神的構成物を建設する場合にも特殊な先驗的機能が必要である。歴史は決して主觀から獨立した客觀的事實の再建ではない——これがジムメルの言ひ分である。

先にもお話ししたやうに、歴史科學の認識論は歴史哲學の一分科として、最近哲學上の傾向に屬するもので、内容的に構成された歴史哲學とは、まったく方向を異にして居るといつてよいだらう……この邊で、歴史哲學の話は打ちきることによしよう。あんまり話しこんで疲勞を越えた疲勞を感じてしまった。その報酬は徒勞であつたやうに思はれるね。歴史哲學よ！ 汝は禍ひなる哉とでも云ひたいね。』

A 『こほすな、僕の方だつてね、死線を越えさうなんだからね。』

B 『やりきれないね。』

A 『ところで、何とも合點の參らぬことには萬國に比類のない吾が日本の歴史家の高説は一向でて來なかつたやうだね。例によつて泰西文化の糟粕を嘗めてゐるからなのかね。』

A 『まつたく日本の歴史家は餘りに眠つて居るね。たまに一人や二人稍々傾聴すべき史論を

吐き、研究を公するかと思ふと、それがどうだらう。きまつた様に畑違ひの人たちなんだ。』

四 日本の史學界

(一) 日本の史學界の現状

B 『要するに日本の史學界の現状としいへば、なんといつても「歴史實のせんさく」をもつて能事終れりとして居られる先生が偉いやうに思はれてゐるね。』

A 『ニイチエが、歴史家を「墓掘り人」とか嘲笑したさうだが、無理もないね。』

B 『ツアラトウストラの著者の毒舌もこの場合には、慥かに一服の清涼劑だらうよ。歴史が歴史である以上「史實のせんさく」も必要にはちがひない。しかし、それだからといつて新しい試みや、研究を、黙殺したり異端視したりする理由は成立たないね。故きを温ねて新しきを知る」といふのが先生ら等の都合の好い旗印であるかも知れないが、どうして、故きを温ねて故きが解らないのだから涙がこぼれるよ。』

A 『だつて、久米博士は「神道は祭天の古俗なり」で、帝大を追放らはれたさうぢややないか。』

B 「そんなことは、今からしたら何でもないことなんだがね。とに角、化石化した頭の「歴史の先生」にとつては、歴史が學として如何なる關係に立つべきであるか、歴史學と他の諸科學との關係如何、歴史はいかなる方法を以て研究せらるべきか、といふことには何の興味も惹かないのである。」

A 「況んや歴史哲學の現状をや、か！」

B 「だから歴史哲學の問題なんか、てんでこの連中には分らないし、そこで日本では歴史家の手では當分歴史書は生れないことになる。」

A 「情けないことを云ふね。」

B 「事實だから仕方がない。それであ、ここに最近眼を通した歴史哲學の小論文があるからそれでもお話してご免を蒙らうよ。」

(二) 日本に於ける歴史哲學

B 「バーデン學派の論理主義でもなく、それで居てマルブルヒ學派でもなく、ベルグソンの直觀とフッサールの學的方法としての現象學を取りいれながら、心理主義に走らずに、論理主義者

の多くが目して限界概念であると、なほざりにしてゐる體驗の本質體系を闡明して、哲學は單なる認識論に止まるを得ずとなして、さらに源流に溯り、「我」の形而上學に、自分の學的根據を發見して、孜孜として独自の哲學體系の組織に耽つてゐるのが田邊元氏である。この人には「科學概論」「最近の自然科學」などの良著がある。さて最近の小論文から氏の所説を一瞥すると、ざつとかうなる。

氏はまづ、自然科學的概念構成と歴史的概念構成との區別をはつきりとさせて、歴史には必ず個人なり民族なり、廣い意味での人格がその全體に統一を與へる主體として含まれなければならないといふのだ。言ひかへれば、自己の内面的創造力によつて、體驗せられた事象を内からその意味に従つて、統一する廣義の人格を主體とするのでなければ歴史は成立しないといふのだ。それなら、體驗によつて事象を内面から統一する人格なるものは、いかにして認識の對象となるかといふ問題が生じてくるだらう。これに對して田邊博士は、リップスの感情移入作用といふのをとり入れて、我々が他の人格を知るのは、之を我々の自らのうちに於て共感により内面的に理解するのであると主張するのである。しかしながら我々個人として限定せられたる主觀が、他の人

格を内から知ることが出来るといふことは、世間の心理學者の解することのできない謎である。どうしても形而上學的説明の力を借りなければならぬ。そこで博士は、現實の一人格は無限に可能なる人格の特殊化的限定せられたものであつてその一々の發展に於て背後には無限に可能なる普通の人格を負ひ、その特定なるものが自由に限定せられて現實になるのであると説くのである。しかも特殊といひ、限定といふとき、既にその半面には普遍と自由とを予想する。個性といふのも普遍的全體の上で限定せられたものでなければならぬ。即ち無限に可能なる全體としての普遍を背後に負ひて、その表面で限定せられたものが特殊の人格となるものであるから、我々の人格は、常に背後の可能なる普遍的全體に於て相通じて居るのである。したがつて、我々には如何なる他の人格の内面的統一をも、内面から理解することができるのである。だから、歴史の認識に於て必要なのは、實にこの理解の明かに廣きことである。主觀の背後にある普遍的全體的人格の立場に自由に立つことを得て、對象とする歴史學全體に統一を與へる人格の内面的發展を内から理解して、これに由つて個性的なる形象を形造ることが歴史家の任務であるといつてゐるよ。それから博士は、歴史のうちに「文學の創作に通ずる藝術性を有することを認め」てゐるの

だ。さうして最後にかう結んでゐるのだ。「若し歴史感 *Historischer inn* としよ如き概念が許されるならば、それは實に此の共感理解を通じての全體の形成をなす能力を指すべきものであるまいか」と言つてゐる。

鈴木宗忠氏は宗教哲學の研究から轉じて社會哲學へと走つた篤學者であるが、氏の專攻するところは新カント派の社會哲學の研究にあるらしい。リツケルトは一方に於て自然と歴史とを對立させ、一方には自然と文化とを對立させる。前者は方法を主として學問の對象を考察したものであり、後者は研究を主として學問の對象を考察したものである。そこで前者から自然科学と歴史學との對立が生じ、後者から自然科学と文化科學との對立が起るといふ。けれども、鈴木博士から見ると、科學の根本的分類は、唯一不動のものでなければならぬ。固より之を分類するのには、方法を標準にしても、對象を標準にするにしても差支はない。したがつて其の結果に相違の生ずるのも當然のことであらう。しかしさうだからと云つて、科學の根本的分類に二個の對立の生ずる如きは適當と考へられぬと云ふのだ。つまり、リツケルトの主張に於て、一方の自然科学は方法を主として分類しても、對象を主として分類しても、依然として自然科学であるのに、他

方の科學はどうだらう。方法を主とする時には歴史學となり、対象を主とする時には文化科學となる。云ふのは、自然科學には學問の獨立性の存することを示し、他方の科學には何處かに其の獨立性の缺けて居ることを表白するのではあるまいか、果してさうであるならばリツケルトの歴史的文化科學の論證は、十分にそれを基礎づけ得たとは云はれないだらう。そこで博士は、リツケルトの主張する科學の根本的分類を完成するには、一の對立に還元することが近道であるとし、リツケルトの學問論の修正を試みようとするのである。」

A 「どう云つた修正内容なのかね。」

「その要點を挙げると、鈴木博士は科學の根本的分類に關しては、リツケルトが對照を標準とする對立を導き出さうとするのである。つまり科學を大きく分けると自然科學と文化科學となり、さらに文化科學が歴史學と組織學とに分れるといふのである。」

A 「も少し立入つて話して貰へないか？」

B 「博士の考へによると、個人的主觀なるものが自己を離れて見たる現實界が自然であり、自己に關係させて見たる現實界が文化である。自己を離れて見ると、現實界は各主觀に共通なる方

面のみが現はれて來るのである。だからこの方面は、各主觀に共通であるが故に、それは主觀には全く關係なく、それ自身の法則に従つて生滅起伏するものと考へられるとして、博士は之を自然と名付ける。自然は主觀に關係ないものと考へられるが故に、其中には價值は含まれてゐないのは無論である。之に反して自己に關係させて見ると、現實界は各主觀に特殊なる方面ばかりが現はれて來て、それに共通な方面は現はれて來ない。各主觀に特殊であるが故に、此方面は、恰も主觀が之を作り出したのであるが如き觀を呈する。それ故に之を文化と名ける事が出来る。文化は主觀に特別の關係を有するが故に、その中には價值が含まれてゐると云はねばならぬ……」

A 「つまり、博士は個人的主觀に基いて、學問の對象である現實界を自然と文化に分類したことになるね。」

B 「さうだ。で、自然を対象とするものが自然科學であり、文化を対象とするものを文化科學とするのだ。言ひ換へると、一般的方法によつて、法則を研究するのを自然科學となし、價值關係の方法によつて、一回起的事實を研究するのを文化科學とするのである。」

A 「大分、こみ入つてゐるやうだが、まあ文化科學と自然科學の分科と對立は分つたとして、

さて鈴木氏は僕等の現に問題としてゐる「歴史學」の位置を、どう解して居られるのだらう。」

B「鈴木博士は、リツケルトが自然科学に對して、歴史、歴史學的科學、歴史的文化科學などと稱して、歴史學と文化科學を同一視してゐるのに對しては、私は賛成できないと云つてゐるよ。つまり博士は、さつき言つたやうに、自然科学に對すべきものを文化科學となして、その文化科學の中から歴史學を導き出さうとするのである。」

A「では、鈴木氏の「歴史」といふものの概念を承つておく必要が生じてくるね。」

B「自然科学の對象である自然は、各主觀に共通な現實界の方面であるが故に、それは主觀によつて異るところはない筈であると鈴木氏は説いてゐる。自然が主觀によつて異るところがないといふのは、それが横から見ても多くの主觀に同様に現はれて來ることを意味すると共に、また縦から見ても、時間によつて變遷はないと云ふ意味である。そこで博士は、時間に依れる現實界の變化を歴史と名づけて差支ないと考へるのであるが、さうすると自然科学の對象である自然には、歴史はないこととなるのである。反對に、文化科學の對象である文化は、各主觀に特殊な現實界の方面であるが故に、それと主觀によつて異なるのである。それ故に自然に對する矛盾對當の關係

によつて、文化には歴史があると云はなければならぬ。この點でリツケルトが文化科學を歴史學的科學と名けたのを博士は正當とするのである。しかし彼れが歴史學と文化科學を同一視したのは正當でないと博士は云ふのだ、そこで文化は時代によつて變遷し、同一なるものに唯の一回のみ起るのであるけれども、過去に於ける文化と現在における文化とは、學問の對象として同等の意義を有することは出来ないとして二つの理由を擧げて居るやうである。」

A「二つの理由？」

B「一、過去に於ける文化は全體を通じて、一の學問の對象となるに過ぎないけれども、現在における文化は、それだけで優に一學問の對象となることが出来る。」

二、過去に於ける文化は、之を概念に取り入れる際には、吾々に存すべき其の普遍妥當な價值に關係させて、事實を組織しなければならぬ。」

かやうに考へて、鈴木氏は文化科學を分ちて二となし、過去の文化を研究するものを歴史學といひ、現在の文化を論究するものを組織學と稱して居るのである。そこで博士は以下の様な結語を與へてゐる「歴史學は文化科學である。そして個々の文化科學には、何れも皆組織學と歴史學

とを含むが故に、文化内容の種類が存する限り、組織學もあれば歴史學もある譯である。且つ文化内容の各種類は、私の考に依れば、論理的には互に對立的のもので、他を隸屬したり、若くは支配したりすることは出来ないが故に、一の組織學が組織學一般であり得ない如く、一の歴史學も歴史學一般となる事はできぬ。各文化の歴史學は各特殊の歴史學である。特殊の歴史學と離れては歴史學一般は存しない。宗教史や法制史が特殊歴史學である如く、政治史も經濟史も、何れも皆特殊歴史學である。世間では往々政治史に對して、他の特殊歴史學を文化史などと稱して居るけれども、私の考へでは、歴史學は凡て文化史である。それ故に文化史といふ語にて、特殊歴史學を示す事が不可であるのみならず、文化史といふ語そのものが既に意味をなさぬのである。

この意見にして許されるならば、今日の歴史學家が政治史を以て歴史學一般とする考へもマルクスが經濟史を以て歴史學一般としようとした考へも、共に斥けられねばならぬ。歴史學は各文化の特殊歴史學である。各文化の特殊歴史學を離れては、歴史學はないのである。」といつて居るのだ。ところで氏が説く如く、マルクスが經濟史を以て歴史學一般としようとしたか否かは、未だ輕々に速斷することのできない問題だらうと思ふ。況んや鈴木博士のマルクスに對する見解は「マル

クスの考へにして果してさうであるならば」と前振れされる如く、すこぶる心細い態度である。僕らは眞摯聰明なる氏に一段の科學的精進を望むや切なるものだ。「或者は、唯物史觀を解して、歴史は經濟史に外ならない。随つて其以外のものは、總て單に假面、即ち實在のない外觀に過ぎないと斷定するものであると、斯様に想像してゐる。斯くて彼等は、卵と牡鶏に關する俚諺的爭論を想起させる様な論鋒を使つて生産用具であるのか、それとも地球であるのかと歴史の眞の本質を發見するに、日も猶ほ足らざる有様である。」といふクローチエの深切なる皮肉を鈴木教授は何と受取られるだらう。」

A 「人の居ないところで喰つてかかつてても覺束ないね。それほど眞面目な君を學問上で激憤させる博士もさる者ぢやないかね。」

B 「これは恐縮する。そりあ鈴木氏は、あんな危なかしい議論をしても、ともかくもマルクスの原文も相當讀んでゐるのだから、まだ、そこいらの社會主義チャアナリストの無批判なマルクス湯仰よりも、マルクス即毒藥視する曲學者よりも、ずつと良いところがあるのは認めるのだがもつと新カント派的臭氣を洗滌して、廣く深く鋭く唯物史觀批判をやつて載く日を、僕等は期待

したいんだね。

この人には宗教哲學の相當な翻譯と、最近では「社會哲學の諸問題」なる著書がある。

その次は、高田保馬氏の「第三史觀」といふのを話し度いのであるが、今、相憎く臺本がないのでなんともお話しすることが出来ないのは残念だ。

高田博士は人も知るごとく、貧弱な日本に於ける有数の社會學者であり「社會學原理」の彪然たる述作を始め「社會學的研究」「社會と國家」「社會學概論」などの著書を通じても分るやうに非常な篤學者のことであるから、或はかなりの獨創も含まれて居るかも知れぬと思ふんだ。』

A 『それは残念だ。ゼヒ聴かしてもらひ度いものだが。』

B 『「思想」に掲載された論文なんだ。甚だ不用意の物のいひやうですまない話だが、僕が一寸ある本屋の店頭で盗み讀んだ二三分のお話をするだけだ、高田氏に云はせると、私は勿論これまでの歴史家の立場である唯心的史觀によるものではない。と云つて決してマルクス派の唯物的史觀にも左祖はしない。それは洵に私自らの歴史觀の立場にあるといふので假りに唯心史觀を第一史觀と呼び、唯物史觀を第二史觀と名づけることが許されるなら、高田博士自身の歴史觀は、』

まさしく第三史觀と稱すべきであるといふのが其の冒頭であつたやうに思ふ。そして何でも「歴史哲學」のところでお話ししておいたジムメルの哲學から示唆されるところが多い様な氣がした？……これ以上は勘辨していただく。』

A 『なるほど。是非いつか手に入れて讀んで見ることにしよう。』

三 日本の歴史家と其著作

B 『故人となつてしまつた京都大學の内田銀藏教授の如きは、とに角、あの頃の非科學的な老大家のうようよしてゐた日本の史學界にとつては、得難き歴史家といふことが許されるだらう博士には「内田博士遺稿全集」が出版されて居るから、特にその中の「史學理論」や「日本近世史」「日本經濟史の研究」ぐらゐは讀んで貰ひたいのだ。

それから「民族と歴史」といふ雑誌を改題して「社會史研究」といふのを主宰して居る京大教授の喜田博士の恩師である東大の坪井博士には「史學研究法」や「歴史地理學」など舊い本であるが、なか／＼爲めになるよ。

死んだ箕作元八氏の「西洋史講話」「世界大戦史」といふ大きな本や「フランス大革命史」社会主義運動史」などもよい本だらうな。何しろ箕作博士は世界的なフランス革命史家だつたさうで、二十年とか三十年とか研究の結晶なさうだが、失禮だが史實は實によく調べてあつても、社会史的経済史的といふ科學的な鋭い理解がゼロなんだね。同じフランス革命史をものにしても、クロボトキンの著書は眼の着けどこがどつかの方だ。」

A 「クロボトキンで、恐るべき無政府主義者ぢやないか？」

B 「だから、眼のつけどころが、どつかの方だつて云ふんぢやないか。クロは矢つ張り何といつても革命家だからね。さて、箕作さんは此頃の言葉でいふと最大のブルジョア史家とでも稱すべきだらうね。この人のお弟子に大類伸といふ博士がある。この人の「城廓の研究」や「西洋時代史觀」「自然と人と歴史」など決して悪い本でないね。氏の文章を通して見るやうに一脈のフレツシユが感ぜられるよ。京大の坂口昂といふ博士も新しい方の歴史家だらうよ。この人の「希臘文明の潮流」は有名なものだし、「概観世界史潮」も讀むべきだね。原勝郎博士には、どんな著書があるか僕は知らない。「西洋近世史十講」とかいふのがさうだつたかも知れない。黒板勝美博士の

「國史の研究」も通讀してよい本だらう。」

A 「それから「法制史の研究」といふ厚い本を出した三浦周行博士はどうかね。」

B 「三浦さんは篤學精勵の學者だらうよ。この人は「日本史の研究」「現代史觀」なども著してゐるね。ひろゆき博士、あれでゐて忠君愛國主義ださうだがから、床しいね。」

A 「あれで居てつて？」

B 「いや、日本史家はかくあるべきだよ。」

A 「都の西北の方へ行くと案外よい先生が教へてゐるね。」

B 「早稲田大學のことかね。」

B 「津田左右吉といふ人は「古事記及び日本書紀の新研究」や「神代史の新しい研究」や「文學に現れたる國民思想」など大部の著書かすらりとあるね。近頃文學博士號を貰つたようだ。それから、例の西村眞次氏が居る。丸善から出した英文の「日本古代船舶史」 A study on the Ancient ships of Japan, と、近頃では「國民の日本史」があるね。新しい歴史家として許していい。何よりも西村教授は歴史哲學のやうな理論ばかり捏ねないで、優れた史的表現をどん／＼や

つて行くところに、頼母しいところがあるね。見渡したところ、日本の寥々たる史學界でもつとも歴史家らしい素質を有つてゐる一人だらうね。

早稲田には一人、歴史家でない面白い人が居るよ。經濟學か、社會學が専門らしい佐野學氏だ。この人の「日本社會史序論」は斷片的ではあるが、氏のマルクス主義の立場から筆を下したので、これまでの日本史とは全く趣を異にしてゐるもの、氏と僕らの唯物史觀に對する見解は、かなりの逕庭が感ぜられる以上、それだけに満足することは出来ない。

社會主義の元老とかいふ堺利彦氏が「平民史」といふのを書いてゐるといふことは餘程以前からの噂さんだが、どうもあの人にどれほどの表現ができるか疑問だらうと思ふ。」

A 「だつて、それは出来て見なけりや批評はできないぢやないか。」

B 「それはさうだ。けれどもあの人に果してね……これも早稲田の先生で久米邦武氏がある。」

A 「そうだ。あの人は僕の郷里の人でね。死んだ大隈侯の親友だ。」

B 「大隈さんの友人だか知らないが、あの人ももう駄目だね。ずつと昔には、君が前にもいつたように「神道は祭天の古俗なり」なんて云つて帝大教授を誡になつたといふが、残念ながら、や

つぱり年と共に古い學者になつたね。この人には「日本古代史」「日本古代史と神道との關係」「國史八面觀」「日本歴史の裏面」「裏日本」などがあつたね。それから死んだ吉田東伍博士は日本人には珍らしい精力家だつたよ。「大日本地名辭書」は永遠に残るだらう。「倒叙日本史」「維新史八講」と「徳川政教考」「日本文明史話」「日韓古史斷」もよいが、「莊園制度の概要」といふのを讀んで見たまへ。

帝大には辻善助とか、萩野由之なんていふ先生がある。辻教授には「日本佛教史の研究」や「親鸞上人眞筆の研究」とかどあつたやうに思ふ。萩野老博士の名前は、ちよつと哲學科の井上哲次郎氏といつた古臭い感じがせぬでもないが、「日本史講話」の勞大冊は何にしても僕らに取つての資料だ。瀬川秀雄博士の「西洋通史」三巻も備へて於いてよい。もう、此の邊で生きてゐても過去に屬する先生方の月旦はよそよよ。」

A 「ニイチエに笑はれそうな連中に愛想をつかしたんだね。」

B 「史學の雜誌といへば京都大學の史學部から「史林」が出てゐるし、東大から「史學雜誌」が出てゐるし、慶應の三田史學會から「史學」が出てゐるのに、早稲田の史學科から、何も出てゐない

様だが、表面的にも影が薄いね。この外、國學院から出る「國學院雜誌」があるし「歴史地理」「社會史研究」なども月刊されてゐる。伊勢の皇學館からも何か出てゐる筈だ。

A 「『中央史壇』とかいふ雜誌も本屋に出てゐるよ。』

B 「それは國史講習會から發行されてゐる。昔は田口卯吉先生などが『史海』といふ素的な雜誌を出してたことがあつた。云ひ忘れたが僕の田舎から出た山路愛山なども勿論古いには違ひないが、豪い歴史家だつたね。白柳秀湖氏にも面白い著書があるね。』

A 「君、國民新聞の廣告を見ると、徳富猪一郎の『近世日本國民史』が有るやうだね。』

B 「蘇峰の書くものは僕は大きくて感心しないね。君、澤山本を書いたからといつて秀れた歴史家だとは云へないからね。それから蘇峰學人の話が出たから思い付いたのだ。竹越與三郎の『二千五百年史』といふのがあるね。同じ三又先生の書いた『日本經濟史』といふ本は、値段が百圓か百五十圓とか云ふのだから、僕らの様なプロレタリア風情には、圖書館へでも行かない限り、手に負へない代物だが、あんな内容のものを『日本經濟史』と銘を打たれたんぢや、それこそ考へものだね。『日本經濟史資料大集成』とでも云ふべきだらう。』

A 「あんまり、悪口が過ぎるやうだね。』

B 「なんの悪口だらう！ 要するに、いろいろな歴史家があり、さまざま歴史書があつても常に新しくして若い僕らの時代にとつては、どれもこれも一切のものが有益な資料に過ぎないことだ！』

A 「すると、依然として日本には今尙善き歴史書かない譯なのかね。』

B 「之は我等の若き世紀のみが、しかも新興階級の青年史家の手によつてのみ、どうしても善き歴史書の果實をあらまさせなくてはならない。さうして今は實に其時であると云へるだらう。

これで、いよく『歴史の話』もおしまひだ。あんまり歴史哲學の關所破りが冗漫に失したのでこれこそほんとうの龍頭蛇尾といふやつだらう。何とも君には申譯けないのだ、まだ是以上に歴史の本質について詳細に語り、あらためて歴史學の概念を歸納的に、もう一度、二人して考へて行つてもよいやうにも思ふのだが、そもく人間の歴史は人類と共に古いのであつても、われわれの歴史學の成立は晩近のことであり、これから斯學發展の本舞臺に入らうとしてゐる秋だから僕ごとき末派が、君のやうな純眞白紙の如き歴史學の童定にむかつて、つべこべと生なかな定義の

剣を振舞ふことは人道的にも科學的にも許し難い罪惡であると考へてくると、空怖しくもなるからこの邊で御免を蒙らう、歴史のシの字以來すつと語合つて來たいろくな歴史の話の中から、君自身の漠然たる歴史學の概念を漁つていたとくより他はない。」

A 『不親切な話だね。』

B 『その次には史學研究法については是非とも一言したいのであるが、これも歴史哲學に禍ひされて詮方ない。だが、史學研究法といふやうなものは、僕らのやうな曲りなりにも歴史を専門にやつて行かうといふ人間には必要缺くべからざることであつても、たゞ一通り新しい歴史の概念を窓際から覗いて見る位の野心しか持てない君のやうな男では、かへつてこちらで力瘤を入れてコツ／＼と話し出さうものなら、今日みたいな春めき渡つた雰圍氣では、なまじか居眠りの避避行でもやり兼ねまじいからね。だから寧ろ是のままでよいのだとさへ思ふのだ。』

A 『温なしくして居ると甘く見られるのが世の習ひだね。僕だからつて史學研究法の一般ぐる知つて置きたいほどの知識慾は多分に持合せてゐるよ。』

B 『失言、失言。その點では坪井九馬三博士の「史學研究法」でも一通り讀んで呉れたまへ。』

ともかくもお互に、これだけ喋りつゞけ彌次りつゞけて來たのだから、もう滿更ら何も知らないといふ君にも、「歴史のシの字も知らぬとは云はせぬ」だけの權利があるよ。』

A 『さうして、僕は明日あたりから新しがる妹のヤツに向つて、「リツケルト歴史哲學批判」ぐらゐのところは、やつてのける義務を負はされさうだね。』

B 『事は苟しくも純然たる一個の科學だ「歴史の話」の大團圓にも、尙お互が、やれ權利だとか、義務だとか云つて、角突き合ふなんて、なんほ世智辛いとはいへ、われ乍ら淺間しい氣持ちがするね。』

A 『世も末になつたね。』

歴史の話 (畢)

往復ハガキにて御申込次第送呈いたします

大正十三年六月一日印刷
大正十三年六月十日發行

〔定價金一圓二十錢〕

話の史歴
附 奥

編纂者 平 栗 要 三

發行者 茅 原 茂

印刷者 東京市牛込區通寺町六九
中 村 萬 次 郎

發行所 東京市本郷區弓町一ノ二五
世界思潮研究會

東京市本郷區弓町一ノ二五

發賣所

日本評論社出版部

振替東京九六七八番
電話小石川一九七一番

最新學藝 問答叢書 吾等何を學ぶべき乎

▲體裁 各冊 四六列洋裝背綴 百五十頁内外 ▲定價 各冊金一圓廿錢・書留送料拾五錢

もでらがな寝もで上車

今！ 私達の周圍には、新しき思想、新しき學說、新しき道德、即ち一切の新生活の潮の烈しい響が聴かれます。本叢書は、人間生活のため眞にして、且つ新なるもの、換言すれば、嚴正なる意味に於いて人間の眞に究め置かざるべからざるもの、一切を網羅し、それを説くに車中でも、寝ながらでも読んで愉快な間に其の神髓を把握し得るやう最も簡明平易の形式と流麗なる文體とを以てし——而も懇到に讀者と座を同じうして代相語るが如く——随つて簡明平易と精確とは本叢書の眼目とするところ、多忙なる現代人としての眼界を廣め、教養を深め、識見を高め、而して明確なる人間的意識を把握するに金錢と時間とを十分に節約し得ての絶好の指針たらしむべき試みが實に本叢書であります。

本叢書の五大特色

- ▼誰人も究め置くべき人間生活必須の新知識をその全域たわたつて解説せる最新知識叢書！
- ▼寝乍らでも電車の中でも氣樂に讀まれ不知不識の中に文化的教養を深めうる新人教養叢書！
- ▼素敵に面白い對話體に碎いて世界最新學藝の眞髓を誰にも容易に把握させる平明學叢書！
- ▼社會改造の根本知識を吸収し新文化の社會化に參し得て時代の先驅者たりうる社會科學叢書！
- ▼安い代價とみぢかい時間でかくも安價なかくも不朽な一大識見も購ひ得べき實益文化叢書！

問答叢書 第一期

第一篇

宇宙の話

文學士 淺野利三郎著 十二版

「宇宙の構造と存続との問題は我々の取扱はなければならぬ」ところの最も遠大な問題である。此の問題の解決こそ、天文學者の最後の目標と認められるものであつて、文明の夜明け以來、常に思想家たちの心を領し來つたものは、實に此の目標への到達といふことであつた。……今や我々は或る程度まで、科學的方法によつて此の問題を究明することが能きる。』本書は、宇宙の構造と存続とについて現代科學の與へ得る知識の輪廓を、極めて平明に、且つ興味深く叙したものである。

第二篇

文化の話

文學士 淺野利三郎著 十五版

文化といふ言葉の意義、内容、限界等を意識した者は甚だ少いやうである。本書は此語の語源より説き起して、その意義の變遷内容、限界等より進んで文化の起源、文化戦争、文化國家、世界國家、文化主義、文化と民族との關係等を述べ、更らに古代及近世に於ける諸民族の文化特相、東西文化の比較、現代文化の特質等、凡そ文化に係ある一切の問題を遺憾なく網羅し解説して居る。故に何人も忙中の小閑を利用して能く文化問題の眞相に通曉する事が出來やう。

納武津著 一十版

第三篇 社會の話

人間は社會的動物であつた、社會を離れて人間の生活は成立たない。家族も民族も國家も凡て一種の社會である。此等のものを背景とし土臺としてのみ吾々の思想、生活文化は構成されて居る。従つて社會の成立、組織、機能、推移等を究めずして人生萬般の事象を十分に會得し理解する事は出來ない。かくて本書に於ては、家族の問題も民族の問題も國家の問題も階段の問題も總てを一括して説明すると共に、又今日の種々なる社會問題に迄言及し、依つて以つて社會と人間生活との關係を明白にした。一讀よく廣大なる人間社會の諸相を了解し得ると共に、又所謂社會問題解決の鍵を搖ることが出來やう。

松本悟朗著 一十八版

第四篇 哲學の話

一體何が哲學であり、如何なる事を研究するのが哲學の本務であるかといふ問題になると、恐らく専門家と強も回答に苦しむ程、その正體は漠然たるものである。本書は何故、哲學が爾かく漠然たる性質を有するか、の理由又は事情より諸家の此れに對する見解、哲學概念の變遷より進んで、その各部門に亘りて縷述し、更にその現在及將來の傾向及運命並びにそれと宗教、藝術其の他の諸科學との關係を出來る丈け包容的に、且つ平易に面白く、解説したものである。

理學士 大久保咏彦著 一八版

第五篇 進化の話

現在とは過去の子であると同時に未來の父であるといふ。此の單純な、然しながら深遠な思想は、獨りすべての科學に大なる影響を與へたばかりでなく、古來の人生觀、世界觀、乃至宇宙觀を根底から覆へしてしまつた。そしてそれは實に近代精神を貫く思想的幹流である、現代に生きる我々の何人と雖も、多かれ少かれ、思想的にその洗禮を受けてゐるものはない。本書は、本書は此の原理を平明に、かつ親切に説明せんと試みたもの、蓋し、特殊な研究の時と機會とを持たぬ一般讀者のために、好指南たるを失はぬであらう。

理學士 大久保咏彦著 一八版

第六篇 進化の話

人間は、神の恩寵により、萬物の長としてその存在を最初から與へられてゐたものであるといふ美しい幻想は、進化の原理によつて物の見事に破られてしまつた。然し我々はそこに何等幻滅の悲哀を見ない。なぜなれば人類は神の恩寵によつてではなく、人類自身の努力によつて、不斷の慘苦な闘ひによつて、その現在の位置を獲得したものであることを知るときに、我々は、我々の前途遙に展開された廣大な視野に心躍るのを禁じ得ないからである。本篇は、我々にとつて特殊な興味の對象でなければならぬといふところの、人類の祖先及びその進化の道程を説いたものである。

問答叢書第一期

理學士 大久保咏彦著 一九版

第七篇

遺傳の話

最近二十年此の方、生物進化の大問題を押し退けて、生物學の舞臺の正面に立つたかの如き觀があるのは、遺傳の問題であるそれは正しくダーウキン以後の生物學的論争の中心點をなしてゐる。然し、それは、單に生物學的の意味からでなく、人種改良社會改善といふやうな、我々の當面の緊急問題と直接密接な關係を有するものとして特に我々の注意を拂はなければならぬところの大問題である。そこで、メンデリズムを中核としてこの方面に於ける最近の研究とその大要を紹介しやうとするのが本篇の意圖である。

マスター・オブ・ブリーツ 弓家七郎著 一七版

第八篇

科學の話

現代文化の基調は科學であると言はれ、又人類が今日迄に到達し得た最高の知的産物は科學であると言はれて居るが、その本質的價値と本質的機能とを了解して居ない故に若し今吾々が眞に科學の根本的性質と其の今日到達し得たる結果とを知るならばそれは全く吾々の想像外であらう。即ち本書は科學の根本的性質、其の價値、其の位置、其の偉大なる功績、並びに其の現状及び將來に關して叙説し、依つて以て科學なるものの總體的觀念を與へやうとするものである。然かも極力乾燥に陥るの弊を避けながら、切心者と雖も快讀一過する事が出来やう。

問答叢書第一期

文學士 淺野利三郎著 一六版

第九篇

心理の話

世の中は何事も心持次第といふ、その心持なるものは一體如何なる性質のもので、又如何なる働きを爲すものであるか、又心と心との接觸、或は心と心との結合に於て如何なる現象を生ずるものであるか、動物の心理、子供の心理、成人の心理、文明人の心理、野蠻人の心理、個人心理、社會心理、其等は如何なる相異を有するものであるか等の種々なる方面に涉りて、出来るだけ廣く要領を説いたものが本書である。

理學士 大久保咏彦著 一六版

第十篇

化學の話

化學は質の學問である。最近世潮は漸く物の皮相的觀察に飽いて本質の詮索に遷らんとしてゐるのは欣ぶべき事である。皮相は尙走馬燈の影だ。若し夫が中心の光によつて投げらるゝ形象である事を知つたならば自ら其中心に入つて思ひの儘に影もつくり得るではないか、本書の目的は未だ化學の何たるを知らざる人の爲に極めて平易に化學を説いたものであるが、其大體に於て可成最近の智識を導入するに努めた。

期一第書叢答問

安島健著

一六版

篇一十第

宗教の話

凡そ人類の文化史上最も早く其の姿を現はしたのは宗教である。宗教は一切の思想一切の學術の起源を爲すものであると同時に、又よく各民族の特質、事情、運命等を語るものである。故に宗教の研究は人間生活又は文化生活の意義と性質とを究むる上に於て缺くべからざるものである。即ち宗教の起源、それと民族心理との關係、その實生活に及ぼせる影響、各宗教の特質、其の發達、學問や藝術に對する其の關係、或はそれが將來の運命等を總説して、依つて以て其の人生的乃至文化的意義を明かにせるものが本書である。苟も人生問題を談ずる者は、本書に收むる所の一般を心得ておく必要があらう。

法學士 早坂二郎著

一十八版

篇二十第

經濟の話

人間生活の基本的條件を爲すものは經濟である。カール・マルクスは人類歴史の根本動因を經濟組織にありと説いたが、それ程經濟問題は吾々の生活の重大要素を成して居るのである。現時の最大問題も、階級闘争の問題も所詮は是れ一種の經濟問題に外ならない。従つて吾々は經濟現象とは何か、經濟組織とは如何に變轉したか、又その變轉は如何なる影響を人類社會に齎したか、それは今後如何に推移すべきか等の諸問題に一通り通じて居なければならぬ。

期二第書叢答問

法學士 宮下文夫著

一三版

篇一第

法制の話

法律が一部職業者の專用物視されて一般國民は法の與へる利益の外に、呆然と立つてゐた時代は去つた。今日は何人も法律を知らねば其生存を完全に保持することの出來ない時代になつた。然も國家の法典は餘りに多岐複雑難解無趣味で到底一朝一夕には知ることが出來ぬ、本書は其法典全部を巧に壓縮し濾過して、何人にも理解し易く且趣味津津たる讀み物としたもので、其上に表解まで加へてあるから、これさへ讀めば充分に法律の要領を其頭に疊み込むことが出来る。

安島健著

一三版

篇二第

倫理の話

「上にあつては星辰の輝く空！ 吾等人間には道德法！」と大哲カントは曾て絶叫した。道德は天體と共に古いが而も亦天體と共に新鮮である。近代の盲動者は道德を廢物視し倫理を冷嘲して得意であるが、吾人が集團生活を營んでゐる限り、一日も倫理を無視することは出來ない。眞に倫理が無視されたは時人間が滅亡に導かれる時だ。倫理は人間の糧であり、干城であり光である、最も權威ある光である。意義ある人生に活きやうと思ふ者は、其の倫理が何であるかを教へた本書を讀め。

問答叢書第二期

法學士 小川恪介著 一六版

第三篇

財政の話

吾人は租税を約入し公債に應募して國家に必要な費用を提供すると同時に一方では國家から種々の福利を興へられてゐる。國家は吾人と離るべからざるものだ。然も其國家の財政豫算がどう成つてゐるかを知らずして、分り易く然も簡潔に説述したもので、從來の學者の著書が多く外國の例を引いて抽象的に説いてゐるのに對して、具體的に我國現下の實際的財政状態を明かにし、財政の社會に對する道德的責任を論述した不世出の快著である。

文學士 淺野利三郎著 一六版

第四篇

教育の話

世界の人々は今一生懸命で新教育の建設に努力してゐる。見よ新しい社會の創造に従事してゐる人々が如何に教育を重視し其施設に全力を捧げて居るかを！幾ら力を盡して改造の爲に戦つても其の改造の本質を持續し成長せしめる社會機能即ち教育が振はなかつたら其社會は根本から壊滅する外はないのだ。總てに於て崩解も改造もまだ途中だが、其中に新教育の芽はグングン伸びて行く。本書は其新教育の趨かんとする所を説いたもので、これこそは世界改造の羅針盤である。

問答叢書第二期

安島健著 一三版

第五篇

美學の話

認識論と倫理學と美學とは新しき哲學に於ける三人の兄弟である。そして其中でも美學は最も人生に直接なものである。凡そ人間として何者も美を愛好せぬ者はなからう。然もその美とは何であるか、美は何故に好ましいのであるかを學的に知つてゐる者は少い。本書に美といふ價値に對する殆んどあらゆる新説を述べたもので、美學を説いた本書の中で一番新しいものである。美の原理についての定見を持つ必要を認めざる者は何を措いても本書を手にはせねばなるまい。

マスタート、ナブ、アーツ 弓家七郎著 一八版

第六篇

都市の話

現代の有する問題中、都市の問題ほど、廣汎で且つ興味に富むものはない。それは實にあらゆる社會問題、文化問題、技術問題を包含してゐる。都市がわかれば現代がわかる。都市は現代の象徴である。著者曰く、本書は出来るだけ忠實に簡単に、都市生活に關する事實を讀者に提供せんと努めた。議論はこの事實を土臺とし、現實を眺めた上で讀者諸君がしてほしい。自分の願は幾分なりとも都市生活に對する廣い見解を、一般讀者に供し得ればそれで充分である。

期二第書叢答問

山内房吉著

一月刊行

第七篇

藝術の話

藝術とは何か？ その起源と本質、その人間生活に於ける位置、而してその哲學殊に美學との關係等を平易にシカも興味深く叙述したものが本書である。從來藝術は或る特殊階級の専有物であつたが今や萬人が總て之を創作し又は鑑賞せんとするに至つてゐる。乃ち著者は特にこの點に注意して、藝術そのものに就いての概念を興へると共に近代及び現の代藝術上の流派、イズム例へば未來派、表現派、ダ、イズム等に論及し、更に所謂「プロレタリアの藝術」の方向を暗示してゐる。

田坂晋三郎著

二月刊行

第八篇

音樂の話

新しき時代人は今や他の如何なる藝術よりも特に音樂をその生活に取容れやうとしてゐる。最近に於ける音樂の流行は實に著るしいもので、音樂はもはや少數専門家の手から解放されて、一般大衆の生活内容に成すものとなつた。これは確に現代に於ける進歩の一現象である。本書は即ち此の民衆化しつつある音樂の通俗にして懇切なる紹介者たることを使命とするもので、其内容としては西洋音樂、日本音樂、樂典、名曲解説、音樂美學等あらゆる音樂上の知識が盛り込まれてゐる。

期二第書叢答問

金田常三郎著

三月刊行

第九篇

言語の話

人間は一時一刻も言語無くして社會を形成することは出来ぬ。言語を話すが故に「人間」であると言へる。此の人間生活に缺くべからざる言語に關する智識、例へば言語の起源言語の發達、世界言語の分布、國際共通語 에스ペラントなどに就いて述べたものが本書であつて、東西兩洋の言語上に血族的の關係がある事や、日本語のイザナギ、イザナミが梵語の男と女とを意味する事や、クロ(黒)は「暗い」アカ(赤)は「明るい」の義から轉化したものである事や、其他興味ある研究に満ちてゐる。

長谷川猪三郎著

四月刊行

第十篇

歴史の話

歴史は死したる過去ではなく現在への科學であり未來への哲學である。リツケルトの歴史哲學が遽かに學界に重きをなさうとして居る時にマルクスの唯物史觀は素晴らしい勢で舊世界をぐらつかせ初めた。そして革命ロシヤは其著しい表現者であつた。實際如何なる主義も運動も其歴史觀の背景なしには最早半歩も進めなくなつた。歴史は今や基督に代る豫言者である、斯くして正しき歴史觀の知識が何人にも必要と成つた時、平易にして正しい概念の供與者として本書は生れた。

期二第書叢答問

安島健著 五月刊行

第十一篇

論理の話

論理學といふものは形式一遍の學問であり、拘子定規の研究であつて全く無價値である如く一般に思はれて來た。然しこれは誤解である。論理學とは實に真正なる智識をうる爲に守らざるべからざる規範を定めることを目的とする科學であつて、先づ之を究めずして眞理の堂奥を探らむとする者は恰も楷梯を踏まずして高閣に達せむとする者に等しい。そこには墜落があるばかりである。本書は平明學藝叢書としての立場から此の智識の權威を價値づける規範科學全面を何人にも容易に理解せしめるやう論述したものである。

法學士 川原次吉郎著 六月刊行

第十二篇

政治の話

政治といふ事は今迄特に一部の政治家のみに関係のある事のやうに誤解されてゐた。然し普通選舉も婦人參政權運動も等しく皆政治現象の一つで、凡そ人間の社會生活は政治と離れて存在する事は出来ない。若しそれが無かつたら動物社會と異ならないだらう。だから政治の本質は何か、現在の政治組織はどう成つてゐるか、國際政治はどうか、將來の政治は如何等の問題に就て一通りの知識を有することは何人にも大切な事である。本書は實に其意味での理想的教科書である。

505
35

終